

甲府城下町遺跡 28

(山梨県甲府市中央4丁目347地点)

—鶴田電気ビル建設に伴う発掘調査報告書—

2022

鶴田電気株式会社
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

全国各地で地域の歴史や伝統行事、さらには自然・景観をも取り上げ、積極的にその活用が講じられつつあります。文化財一つ一つが伝える物語は、かつてそこにあった人々の営みや喜怒哀楽を伝え、往時の街の賑わいや、風土や景観をも伝えることとなります。これらを後世に伝えることは、今を生きるものが果たすべき「次代との約束」であり、その活用は現代を生きるものの重大な責務であると再認識いたします。

本書は、開発に先立ち実施した甲府城下町遺跡の発掘調査報告書であります。調査地点は、近世甲府城下町内に位置する町人地の一画で、甲州道中に面した商業地であり、中心市街地として町の繁栄と軌を一にして発展してきました。近年、人口減少による空洞化により往時の賑わいが大きく変貌しつつありますが、江戸時代以来の貴重な遺産が重層し、歴史あるこの地域で、発掘調査が行われたことは誠に意義深く貴重なものであります。

今回の調査に際しては狭小な範囲でありましたが、多彩な植物遺体・昆虫化石を始めとした多種多様な遺物が出土し、連綿と続いてきた人々の生活の営みの一端が明らかとなりました。

本書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となればこの上ない喜びであります。

末筆となりましたが、この度の記録保存に際し、貴重な歴史遺産に対する深いご理解を賜り、ご協力を頂いた鶴田電気株式会社及び発掘調査から報告書刊行までご尽力を頂いた昭和測量株式会社を始めご支援を頂いた関係各位に、感謝申し上げますとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

甲府市教育委員会

教育長 數野 保秋

例 言

1. 本書は、山梨県甲府市中央四丁目 347 に所在する甲府城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鶴田電気株式会社の新社屋（鶴田電気ビル）建設に伴う土木工事に先立つものであり、事業者である鶴田電気株式会社の費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、鶴田電気株式会社、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。

[調査体制]

調 査 担 当 望月健太・浅川晃一（以上、昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課）

調 査 顧 問 新津健（昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課研究顧問）

調 査 監 導 伊藤正彦（甲府市教育委員会）

発掘従事者 齊藤里美・佐野香織・内藤敏夫

整理従事者 浅川悠起子・今福ともみ・佐野香織

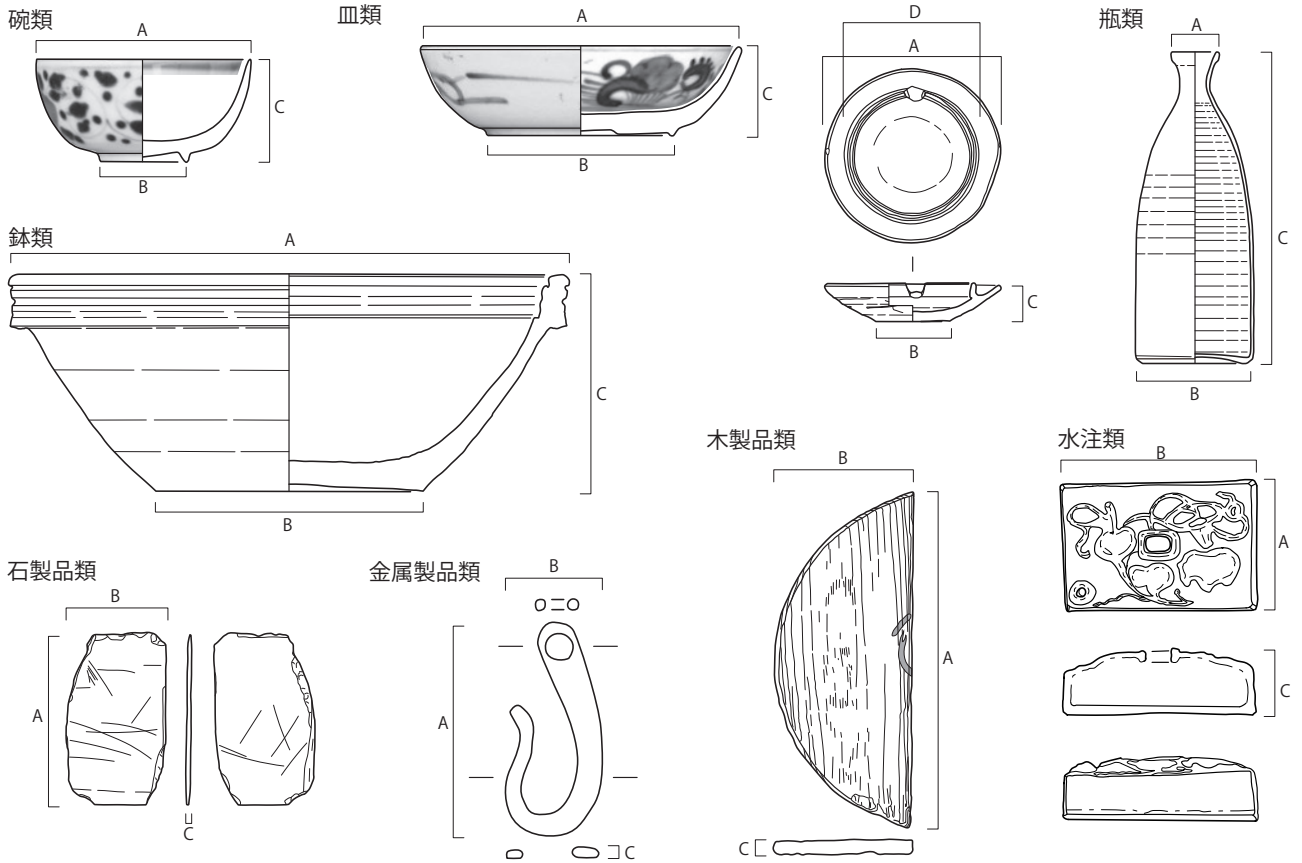
4. 試掘確認調査は甲府市教育委員会生涯学習室歴史文化財課の伊藤正彦が担当した。本発掘調査は令和3年5月24日から31日まで行った。整理報告書作成業務は令和3年6月1日から令和4年3月15日まで、昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真・遺物写真は、望月健太・浅川晃一が撮影した。
6. 本書の編集は望月健太が行った。執筆分担は以下の通りである。
第5章第1節：バンダリ スダルシャン（株式会社パレオ・ラボ）、
第2節：森勇一（東海シニア自然大学）・株式会社パレオ・ラボ、第3節：三谷智広（株式会社パレオ・ラボ）
その他の執筆は望月健太が行った。
7. 本調査における木製品および金属製品の保存処理は公益財団法人山梨文化財研究所に、自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、文化財保護行政をご理解いただき、発掘調査にご協力いただいた事業者に厚く御礼を申し上げます。また、次の機関および諸氏から御指導と御協力、資料提供を賜った。深く感謝の意を表する。
株式会社パレオ・ラボ、公益財団法人山梨文化財研究所、山梨県立博物館、森将志、山本華、畑大介、三浦麻衣子、志村憲一、鷹野義朗（順不同・敬称略）
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会で保管している。

凡例

1. 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の電子地形図 1/25,000、甲府市役所発行の都市計画基本図 1/2,500 を用いた。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図の X・Y 座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高 (T.P.) を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) に基づいた。
7. 本書に掲載した絵図等の資料名および権利者は、原則として各資料に表示した。
8. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。
土坑：SK 小穴・柱穴：Pit 石列：SS 性格不明遺構：SX
9. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
10. 遺構平面図における一点鎖線は攪乱、破線はサブトレンチ・推定線である。
11. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

木 (遺構図)  石断面 
 墨 (遺物図) 

12. 遺物観察表の法量の計測方法の凡例は以下の通りである。



本文目次

第1章 調査の経過	1	第4章 調査の成果	11
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 第1遺構面	11
第2節 発掘作業の経過	2	第2節 第2遺構面	12
第3節 整理等作業の経過	2	第5章 自然科学分析	28
第2章 遺跡の位置と環境	3	第1節 甲府城下町遺跡(中央4丁目地点)から出土した大型植物遺体	28
第1節 地理的環境	3	第2節 甲府城下町遺跡(中央4丁目地点)から出土した昆虫化石	33
第2節 歴史的環境	3	第3節 甲府城下町遺跡(中央4丁目地点)出土の動物遺体	41
第3章 調査の方法と層序	7	第6章 総括	42
第1節 調査の方法	7	第1節 廃棄場所として継続利用された敷地内特定エリア	42
第2節 基本層序	8	第2節 土壌試料の分析からうかがえる貯蔵施設の存在	44

挿図目次

第1図 本調査区と近隣調査状況	1	第12図 出土遺物(2)	19
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	4	第13図 出土遺物(3)	20
第3図 基本層序(1)概略	8	第14図 出土遺物(4)	21
第4図 基本層序(2)南壁	9	第15図 出土遺物(5)	22
第5図 基本層序(3)西壁	10	第16図 出土遺物(6)	23
第6図 全体図(1)第1遺構面	13	第17図 出土遺物(7)	24
第7図 全体図(2)第2遺構面	14	第18図 出土遺物(8)	25
第8図 遺構図(1)	15	第19図 調査地点の推定位置	43
第9図 遺構図(2)	16	第20図 大正9年(1920)頃の土地利用	43
第10図 遺構図(3)	17	第21図 昭和16年(1941)頃の土地利用	43
第11図 出土遺物(1)	18	第22図 SX1・地下式坑の推定位置	44

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	5	第4表 遺物観察表(木製品)	27
第2表 遺物観察表(土器・陶器・磁器)	26	第5表 遺物観察表(石製品)	27
第3表 遺物観察表(土製品)	27	第6表 遺物観察表(金属製品)	27

写真図版目次

図版1 遺構(1)	図版4 遺物(1)
図版2 遺構(2)	図版5 遺物(2)
図版3 遺構(3)	

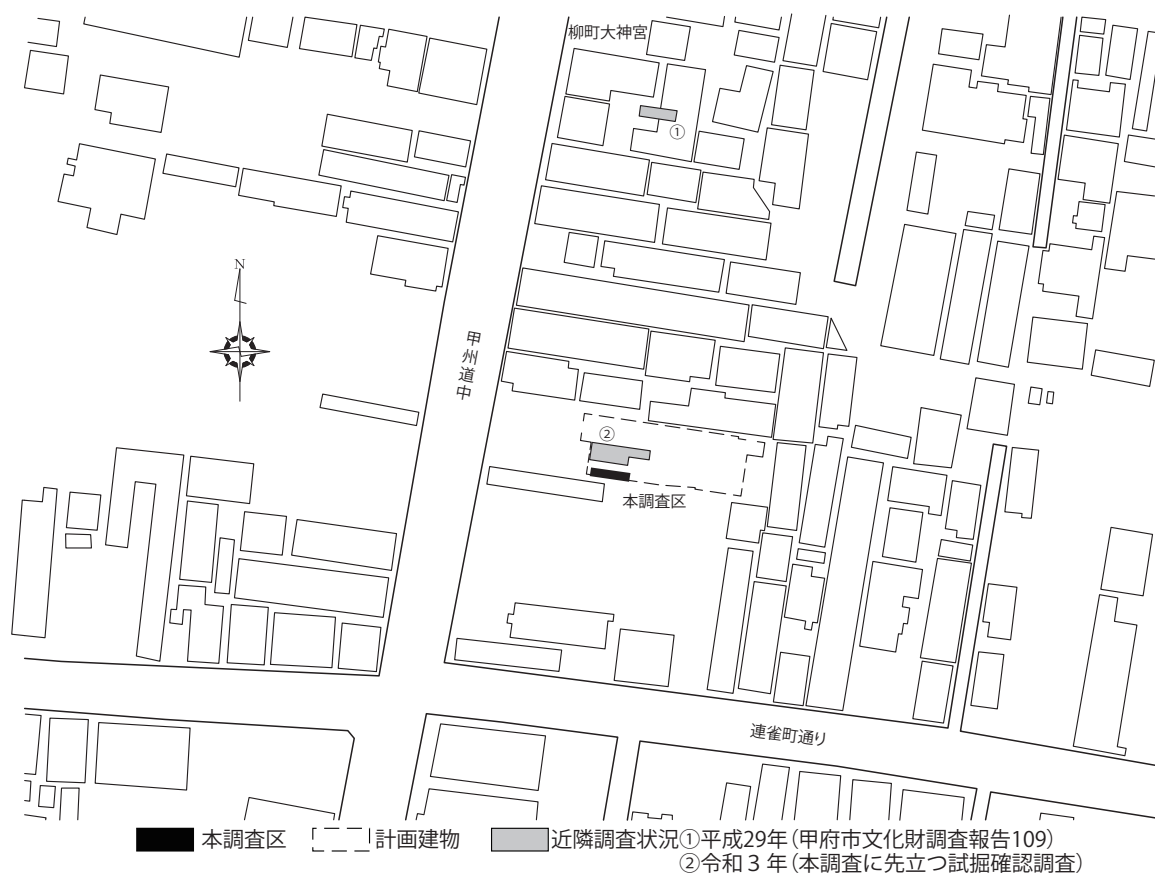
第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯（第1図）

周知の埋蔵文化財包蔵地である甲府城下町遺跡内において、事務所の建設が計画され、開発に先立ち令和3年2月19日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出が、事業者より甲府市教育委員会へ提出された。令和3年3月5日付文化第3952号で山梨県知事より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知され、令和3年4月5日から19日にかけて甲府市教育委員会が試掘確認調査を実施した。

調査の結果、当該地に埋蔵文化財が遺存することが確認され、当初の開発計画では埋蔵文化財が失われる可能性が高いことが判明したため、令和3年4月13日に現地にて甲府市教育委員会より事業者へ説明されるとともに、両者による協議が行われた。協議の結果、盛土による埋蔵文化財の保存措置を講じるとともに、開発が及ぶ範囲は事業者の負担にて記録保存することとなった。

令和3年4月23日、「山梨県内の記録保存のための埋蔵文化財調査における民間調査組織の利用に関する指針」に基づき、事業者より昭和測量株式会社が発掘調査業務を請け負い、事業者、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、同日付で文化財保護法第92条第1項に基づく届出を昭和測量株式会社が提出した。令和3年5月17日付文化第743号で山梨県知事より、埋蔵文化財発掘調査の実施について通知され、令和3年5月24日から発掘調査に着手し、記録保存を行った。



第1図 本調査区と近隣調査状況

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は令和3年5月20日から5月31日の期間で実施し、準備工を含めた調査経過の概略は下記の調査日誌抄録の通りである。

調査日誌抄録

令和3年

- 5月6日(木) 調査区周辺の既存基準点の現況、搬入路等の確認のため踏査。
- 5月10日(月)・11日(火) 既存基準点から標高移設、場内へ仮設基準点設置と調査区範囲の測り出し。
- 5月20日(木) 甲府市教育委員会担当者と現地打合せ、近隣住民への挨拶。
- 5月24日(月) 発掘機材・重機・仮設トイレの搬入、重機による表土掘削、仮囲いの設営。
第1遺構面の遺構プランを検出し、遺構の掘削と図化等の記録を開始。
- 5月25日(火) 第1遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。
第2遺構面への掘り下げ開始。
- 5月26日(水) 第2遺構面の遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削と図化等の記録を開始。
- 5月27日(木) 降雨につき現場作業中止。基礎整理作業として出土遺物の洗浄を行う。
- 5月28日(金) 雨水の排水・現場復旧。第2遺構面の記録を完了し、完掘状況を撮影。
- 5月31日(月) 雨水の排水・現場復旧。調査区全体の堆積土層断面図を作成し、土壌試料を採取。
調査区を埋め戻し現況復旧を行い、当日中に重機等の搬出含め現場撤収作業を完了した。

第3節 整理等作業の経過

整理作業および報告書刊行業務は、令和3年5月27日から令和4年3月15日の期間で、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社埋蔵文化財調査課の事務所内にて実施した。

整理作業は出土遺物の洗浄・注記の基礎整理から始め、接合・復元ののち報告書掲載遺物を選別した。選別した遺物は手書きで実測したのち、デジタルトレース・写真撮影等の記録作業を行い、並行して遺物観察表の作成や、現場で記録した実測図の整理作業を行った。その後、挿図・図版の編集を行い、原稿の執筆、全体の編集と作業を進め、令和4年3月15日に調査報告書を刊行した。

なお、整理作業中は必要に応じて甲府市教育委員会と連絡・打合せを行い、取り上げた木製品・金属製品の一部分については、保存処理を公益財団法人山梨文化財研究所へ委託した。また、取り上げた魚類骨や採取した土壌試料については、自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (第2図)

甲府城下町遺跡は、甲府盆地北方の奥秩父山地の太良峠（標高 1152m）麓に端を発する仲川・相川によって形成された相川扇状地の扇端部の甲府盆地北縁に位置する。城下町は、西側を相川、北東側を愛宕山（標高 423m）と夢見山（標高 439m）の縁辺に沿って東流する藤川、そして南側の荒川と、3つの河川に囲われており、中心となる甲府城は、独立峰である一条小山（標高 304 m）に築かれた平山城である。

城下町は、武田氏統治期の中世城下町（武田城下町遺跡）から組み込まれ整備された甲府城北西側の上府中（古府中）26町と、甲府城南東側に新たに造営し整備された下府中（新府中）23町の全49町で構成される。武田氏統治期から引き続き甲斐国の政治・経済の中心となったことから、甲府城下町には元柳町や元三日町といった武田氏領有期の町の所在を伝える名や、柳町や三日町、八日町など継承された町名が各所に見られる。また、城下町一帯に一の堀（内堀）、二の堀、三の堀と、三重の堀を巡らし、町全体による防御を重視する総構えを見せ、二の堀を境に内側を武家地、外側を町人地としていた。甲府市中心部には現在も水路や河川として二の堀、三の堀が部分的に残されており、三の堀郭内の南北約 2.2km、東西約 1.8km（約 257ha）の範囲が埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」として周知されている。

調査地点は、甲府城より南南東へ 740m 地点の旧柳町三丁目に所在し、標高は 263m を測る。周辺には、城下町特有の奥行き長い短冊形地割が良く残されており、調査地西側の間口は、江戸と結ぶ基幹道路「甲州道中（街道）」に面している。近世の柳町には宿場が営まれ、八日町・山田町・三日町とならぶ甲府城下における経済の中心地であるとともに、城下最大の人口を擁していた。

第2節 歴史的環境 (第2図・第1表)

先土器時代

調査地周辺で周知されている遺跡は無いが、八幡神社遺跡（42）よりナイフ形石器を含む石器4点が報告されている。また、甲府城下町西側を南流する相川中流域の河床より、ナウマンゾウの臼歯の化石が発見されており、地層の年代研究から、8万年以前のもものと推定されている。

縄文時代

調査地周辺では主に山裾付近や扇状地地帯に分布し、盆地底部では数少なく、周知されている遺跡の大半は散布地と位置づけられる小規模かつ短期間の遺跡である。盆地北縁という立地上広大な平坦地に乏しく、継続的な大規模集落を形成し難いと考えられ、山裾の小規模遺跡は、狩猟・採集などの季節的なキャンプ地として営まれたと推定される。八幡神社遺跡（42）からは住居址の発見は無いが、黒曜石を主とする石器・剥片が 10,000 点を超えて出土しており、特に 180 点に上る石鏃と剥片の多さから石器製作の場である可能性が示唆されている。

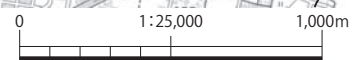
数少ない集落跡としては、上石田遺跡（77）、朝気遺跡（98）、北原遺跡（57）などが挙げられる。上石田遺跡は荒川中流域右岸の微高地に位置し、盆地底部から初めて報告された縄文集落跡である。主に縄文時代前期後葉から中期後葉にかけての集落跡で、竪穴住居址をはじめ、石囲い土坑墓、埋甕のほか、焼石を用いた調理施設と推定される集石遺構が発見されている。朝気遺跡は縄文時代以降も継続して集落を形成し、北原遺跡では7世紀代に古墳群が形成された。

弥生時代

幸町 A 遺跡（91）で行われた調査により、山梨県内でも例の少ない弥生時代中期後半の土器が発見されている。この時期より、稲作の普及とともに、狩猟・採集を中心とした縄文以前の山間地を離れ、居住域が平坦地の多い盆地底部へ移り変わる。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図



第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城下町	30	湯村山城跡	中世	城館跡	59	南善光B遺跡	古墳～平安	散布地	88	湯田一丁目遺跡	古墳	散布地
2	甲府城跡	近世	城館跡	31	湯村山6号古墳	古墳	古墳	60	地蔵北遺跡	古墳～平安	散布地	89	伊勢町遺跡	古墳	包蔵地
3	武田城下町	中世	城下町	32	湯村山5号古墳	古墳	古墳	61	亥ノ兎遺跡	平安～	散布地	90	食糧工場遺跡	縄文・弥生	包蔵地
4	武田氏館跡	中世	城館跡	33	湯村山4号古墳	古墳	古墳	62	大六天遺跡	平安～	散布地	91	幸町A遺跡	弥生	包蔵地
5	西前田A遺跡	中・近世	散布地	34	湯村山3号古墳	古墳	古墳	63	宮裏遺跡	平安～	散布地	92	幸町B遺跡	古墳	散布地
6	西前田B遺跡		散布地	35	湯村山2号古墳	古墳	古墳	64	宮の脇A遺跡	縄文・平安～	散布地	93	南口A遺跡	平安	散布地
7	不動遺跡	近世～	散布地	36	湯村山1号古墳	古墳	古墳	65	宮の脇B遺跡	縄文・平安～	散布地	94	南口B遺跡	平安	散布地
8	日影遺跡		散布地	37	万寿森古墳	古墳	古墳	66	御崎田遺跡	平安	散布地	95	木保遺跡	近世	散布地
9	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地	38	和田無名墳	古墳	古墳	67	銀杏の木	平安～	散布地	96	般舟院跡	中世	寺院跡
10	御馬屋小路B遺跡		散布地	39	緑が丘二丁目遺跡	縄文～平安	集落跡	68	東光寺遺跡	平安～	散布地	97	住吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
11	土屋氏館跡	中世	城館跡	40	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡	69	宮の前遺跡	縄文	散布地	98	朝気遺跡	縄文～平安	集落跡
12	十二天遺跡	平安	散布地	41	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地	70	上郷遺跡	平安～	散布地	99	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
13	永井遺跡	古墳・平安	散布地	42	八幡神社遺跡	縄文	散布地	71	本郷遺跡	縄文・古墳～	包蔵地	100	家之前遺跡	平安	散布地
14	お塚さん古墳	古墳・平安	古墳	43	コツ塚古墳	古墳	古墳	72	本郷B遺跡	平安～	散布地	101	中坪遺跡	古墳	散布地
15	三光寺山遺跡	古墳・平安	古墳	44	一ツ塚古墳	古墳	古墳	73	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地	102	十丁遺跡	古墳	散布地
16	躰塚ヶ崎亭跡	中世	城館跡	45	二ツ塚1号墳	古墳	古墳	74	宝町遺跡	縄文・平安	散布地	103	十丁B遺跡	古墳	散布地
17	峰本南A遺跡	近世	寺院跡	46	二ツ塚2号墳	古墳	古墳	75	寿町遺跡	古墳～	散布地	104	字前A遺跡	古墳	散布地
18	峰本南B遺跡	近世	散布地	47	二ツ塚3号墳	古墳	古墳	76	上石田B遺跡	平安	散布地	105	字前B遺跡	古墳	散布地
19	村之内遺跡	古墳～平安	散布地	48	善光寺塚1号墳	古墳	古墳	77	上石田遺跡	縄文	集落跡	106	字前C遺跡	古墳	散布地
20	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地	49	善光寺塚2号墳	古墳	古墳	78	上河原遺跡	平安～	散布地	107	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
21	向田B遺跡		散布地	50	北原無名1号墳	古墳	古墳	79	淡沢遺跡	平安～	散布地	108	青葉町遺跡	平安	散布地
22	長閑遺跡	中世	包蔵地	51	富士見遺跡	古墳・平安	散布地	80	久保北河原遺跡	平安	散布地	109	北桜遺跡	平安	散布地
23	大手下遺跡	縄文	散布地	52	塩部遺跡	弥生～平安	集落跡	81	大北河原遺跡	平安	散布地	110	野村遺跡	古墳～平安	散布地
24	永慶寺跡	近世	寺院跡	53	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地	82	宮北遺跡	縄文・平安	散布地	111	油田遺跡	平安	散布地
25	岩窪C遺跡	古墳	散布地	54	大笠山水の元遺跡	古墳～平安	散布地	83	秋山氏館跡	中世	城館跡	112	居村遺跡	近世	散布地
26	中道東遺跡	近世	散布地	55	堤下A遺跡	平安～	散布地	84	千松院遺跡	中世～	散布地	113	淵之上遺跡	古墳	散布地
27	中道西遺跡	古墳	散布地	56	堤下B遺跡	平安～	散布地	85	太田町遺跡	古墳～	散布地	114	二又遺跡	古墳	包蔵地
28	岩窪遺跡	奈良～中世	包蔵地	57	北原遺跡	縄文・平安	集落跡	86	青沼遺跡	古墳	包蔵地	115	外河原字クヤ遺跡	古墳～平安	散布地
29	茶堂峠火台	中世	城館跡	58	善光寺裏遺跡	縄文～平安	散布地	87	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地				

第2図および第1表は、甲府市教育委員会発行の『甲府市遺跡地図』（平成4年）をもとに、現在までに範囲等の情報が更新された遺跡については、更新後の情報を反映し作成した。

古墳時代

居住域が平坦地の多い盆地底部へ移り変わったことから、弥生時代後期より平安時代まで長期間継続する遺跡が多く見られる。集落跡としては、相川中流域右岸に所在する緑が丘二丁目遺跡（39）、緑が丘一丁目遺跡（40）、塩部遺跡（52）のほか、朝気遺跡（98）が挙げられる。緑が丘二丁目遺跡では、平成29年の調査で弥生時代後期から中世までの8時期に分けられる遺構の変遷が確認された。塩部遺跡では、平成7年の調査で、方形周溝墓の周溝から4世紀後半とされる家畜としては日本最古級のウマの歯が出土している。また、平成28年の調査では、古墳時代後期の流路から多数の木製品が出土しており、織機の部材と推定される木製品も報告されている。

6世紀になると、盆地北縁の山麓や山頂に古墳が築造され始め、湯村山（標高446m）の南山麓には大型の横穴式石室を持つ万寿森古墳（37）や積石塚である湯村山古墳群東支群（31～36）、大笠山西斜面の二ツ塚古墳群（45～47）や東山麓の北原古墳群（50）が挙げられる。

奈良・平安時代

調査地周辺は『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷の一つ、青沼郷に属すると推定される地域である。正倉院宝物には「巨麻郡青沼郷物部高嶋調壺匹」と墨書された調絙があり、これは天平勝宝4年（752）に行われた奈良東大寺大仏開眼供養に用いられた伎楽面の袋の裏裂として使用されたという。このことから、奈良時代には青沼郷が成立しており、物部連に関連する人物が居住したことが明らかとなっている。

朝気遺跡（98）は甲府市中央部を東流する濁川右岸の微高地に所在し、周知面積が26haに及ぶ縄文時代から平安時代にかけての集落跡であるが、特に古墳時代から平安時代に画期が見られる。この時代の遺構としては、南東隅にカマドを持つ住居址や、頭を北に伸展葬された男性人骨がある。出土遺物に石帯の石英製巡方や水晶製の小玉、灰釉・緑釉陶器などが見られることから、巨麻郡青沼郷の中心域と推定されている。

中世

源義光（新羅三郎義光）を祖とする甲斐武田氏は、平安時代末の2代義清・3代清光が、巨摩郡市河荘を基盤に甲斐国中に勢力を拡大した。清光の子、4代信義の頃には甲斐武田氏を中心とする武士団が形成され、5代信光（信義五男）は甲斐国中央部の石和へ本拠地を移す。このころ、信義嫡男の忠頼が一条郷を領したことから、一条氏を称し一条小山（2）に居館を築くが、忠頼は寿永3年（1184）に源頼朝によって謀殺される。その菩提を弔うため夫人が小山に建立した尼寺が、時宗寺院の稲久山一条道場一蓮寺の前身と伝わる。以後、信光の系譜が甲斐武田嫡流として甲斐国守護と惣領を継承することとなるが、南北朝の動乱以降、武田家は甲斐国内外の諸勢力や一族との対立・抗争を繰り返した。

甲斐国内を掌握した18代信虎は、16代信昌の築いたとされる甲府市東部の川田館から、甲府市北部の躑躅ヶ崎の地へ永正16年（1519）に居館（4武田氏館跡。通称、躑躅ヶ崎館）を移すとともに、寺社を配し居館周囲に家臣や商工人を集住させた武田城下町（3）を整備することで、甲斐国の新たな府中とした。

扇状地地帯に築かれた躑躅ヶ崎館は、『甲斐国志』に「左右鶴翼の如」と記されるように、三方を山に囲われた天然の要害を呈し、北方に詰城として要害城とその支城である熊城、西方に湯村山城（30）、南方の一条小山（2）に砦が築かれるとともに、烽火台（29・30）が設置された。この際、一蓮寺は一条小山の麓に移転された。躑躅ヶ崎館は、信虎・信玄・勝頼の3代の居館となったが、天正9年（1581）の新府移後転間もなく織田信長の甲州征伐により、甲斐武田氏は滅亡した。

武田氏滅亡直後の織田領となった甲斐国は、信長の家臣河尻秀隆による支配となったが、天正10年（1582）6月の本能寺の変により信長が討たれると、秀隆もまた武田遺臣による国人一揆により没したため、天正壬午の乱を制した徳川家康が変わって領主となる。この時期の甲斐国は、家康の家臣平岩親吉が支配することとなり、躑躅ヶ崎館には新たな曲輪や天守台が築造され、甲府城の築城も始まる。豊臣秀吉により天正18年（1590）に家康が関東に移封されると、甲府城の築城は、加藤光泰、浅野長政・幸長父子といった豊臣家の家臣に引き継がれることとなり、甲府城は慶長5年（1600）に浅野家が紀州に移封される時点で一応の完成を見せていたようである。また、一蓮寺は築城に伴い現在の甲府市太田町に移転された。

近世

関ヶ原の合戦の後、甲斐国は再び徳川領として、最初期は徳川家康の家臣平岩親吉や家康の九男義直が城主となり、その後幕府直轄領として城番が置かれ、寛文元年（1661）からの甲府徳川家による藩制のように、徳川一門による支配がなされた。宝永元年（1704）からの20年間は、幕府大老格で甲斐武田氏の流れを汲む柳沢吉保と、その子吉里が藩主となり、甲府城の大規模改修や、城下町の再整備が行われた。吉里は甲府に在国した唯一の藩主であり、参勤交代により1年ごとに江戸と甲府を往復した。天保9年（1724）に藩主吉里が大和郡山へ移封を受けると、以後甲斐国は幕府直轄領として幕末まで甲府勤番支配制となった。慶応2年（1866）には甲府勤番を廃止し甲府城代が置かれたが、慶応3年（1867）に大政奉還を受け、慶応4年（1868）官軍により甲府城は開城した。

近代・現代

甲府城下町は明治6年に県令藤村紫朗の政策により二の堀、三の堀が埋められ市街化が進み、明治7年（1873）には太政官布告により甲府城が廃城となった。城内には明治9年（1876）に勸業試験場が、明治10年（1877）には葡萄酒醸造所が設置され、明治33年（1900）には甲府中学校が建設された。明治36年（1903）には解体された清水曲輪に甲府停車場が開業され、甲府城は鉄道（JR中央線）により南北に分断されるかたちとなり、大正15年（1926）には県庁舎建て替え、さらに昭和30年（1955）には県民会館建設に伴い内堀が埋め立てられ、後の景観の基礎が形作られた。市街地は太平洋戦争末期の昭和20年（1945）の空襲により焦土と化した。その後の復興により今日に至る。

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

計画された建設面積は261.30㎡である。本調査に先がけ甲府市教育委員会が実施した試掘調査により、部分的に過去の開発が及んでいるが、現地表下約50cmより土坑・井戸・溝・地下式坑などの遺構が検出され、遺構面直上には厚さ約10cmの遺物包含層が堆積していることが確認された。

試掘調査の結果を受け、開発計画を変更し盛土による埋蔵文化財保護措置を講じることとなったが、設計上、南側隣地境界付近の面積8.125㎡において埋蔵文化財保護が困難であった。このことから、発掘調査による記録保存を実施することとなった。調査区は東西6.5m、幅1.25mのトレンチ状であり、調査期間中は、調査区への侵入・転落等の予防のためネットフェンスによる防護策を講じるとともに、表土掘削等の各種工程毎に教育委員会担当者の確認を受け、作業工程の打合せを行った。

重機による表土掘削は、遺物包含層直上の現地表下約40cmまで行った。調査区南側（隣地境界）では、現地表下約25cmで昭和20年の甲府空襲に伴う瓦・煉瓦混じりの戦災焼土層を厚さ10～15cmで確認したが、調査区北側では戦災焼土層は東端部にわずかに残されるのみであった。また、戦災焼土層下においても、甲府空襲以前の開発に伴う攪乱と客土が見受けられた。

遺物包含層の掘削は人力によって行った。第1遺構面の包含層掘削に並行して、調査区西端部に設定したサブトレンチを人力で現地表下約160cmまで掘削して土層観察を行い、第2遺構面と自然堆積層を確認した。

包含層を除去したのち、鋤簾・両刃三角鎌を用い精査し遺構プランの検出を行った。検出された土坑状・小穴状の遺構プランについては、半截し土層の撮影と実測図作成ののち完掘した。石列を伴う遺構については、調査区中央付近で石と覆土をベルト状に残し、同じく土層の記録ののち完掘した。このほか必要に応じて土壌試料を採取した。

現場調査では、トータルステーション（SOKKIA CX-105）・ノートパソコン（Panasonic TOUGHBOOK CF-19）・cubic社「遺構くん」を用いた電子平板システムで、遺構形状や遺物取り上げ時等の測量を行い、デジタル一眼レフカメラ（Nikon D7200 + AF-S DX NIKKOR 18-140mm 3.5-5.6G ED VR）を用いて記録写真の撮影を行った。また、完掘写真等ではミラーレス一眼カメラ（SONY α 5100 + E 20mm F2.8 SEL20F28）を用いてポールによる高所撮影を行った。撮影した高所撮影写真は、Agisoft社「PhotoScan Professional」を用いて三次元モデル・オルソモザイク写真を作成した。

整理・報告書作成では、遺物の撮影にデジタル一眼レフカメラ（Nikon D7200 + AF-S DX NIKKOR 18-140mm 3.5-5.6G ED VR）を用いた。また、デジタルトレース、写真補正、挿図・図版作成、編集作業にはadobe社「illustratorCC」「PhotoshopCC」および「InDesignCC」をそれぞれ用いた。

第2節 基本層序 (第3・4・5図)

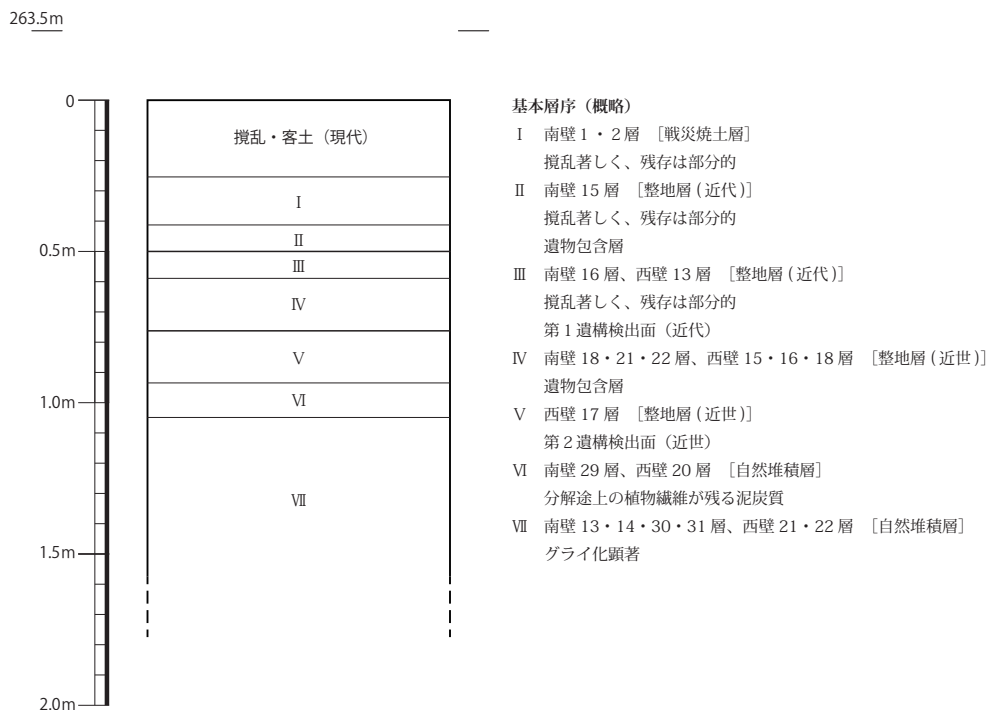
調査区は現地表面において、長軸方向である東西長さ6.5m間で、比高差24cmを測る標高263.23～262.99mに所在し、柳町通り(旧甲州道中)に面した西側の間口から東側の奥行き向けの傾斜している。基本土層の、概略(第3図)と南壁(第4図)・西壁(第5図)を図示した。

I層(南壁1・2層)は太平洋戦争末期の昭和20年7月6日深夜から7日にかけてアメリカ軍によって行われた空襲に伴う戦災焼土層である。II層(南15)は近代の整地層で、焼土と炭化物を極微量に含む黒褐色粘土層である。第1遺構面は攪乱およびI・II層を除去した先の、III層(南16、西13)の上面である。南16層は黒褐色粘土で焼土と炭化物を多量に含み、西13層は褐灰色粘土で褐色粘土が多量に混じる。第1遺構面に帰属する遺構は、現地表下約50cmの標高約262.8mで検出した。

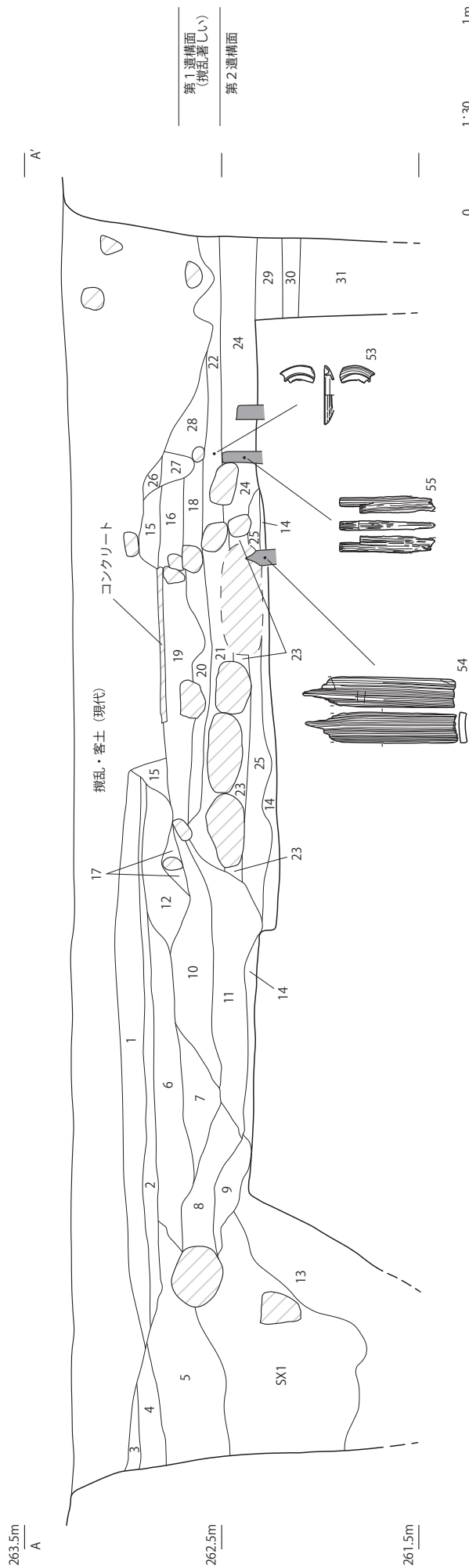
I～III層は戦後に行われた開発によって著しい攪乱を受ける。また、南3～5層は近・現代の廃棄場で、炭化材と灰塊が積層するとともに、油分・油臭が目立つことから焼却に用いられたと推定される。

IV層(南18・21・22、西15・16)は近世段階の整地層である。南18・22層は炭化物を極微量に含む黒褐色粘土である。西15・16層は直径3～10cmの礫を多量に含む褐灰色粘土で、土壌改良を目的に客土されたと考えられる。第2遺構面は、III・IV層を包含層として除去した先の、近世整地層であるV層(西17)の上面で、部分的に近代の攪乱が及んでいる。V層は良く締め均質な褐灰色粘土である。第2遺構面に帰属する遺構は、現地表下約80cmの標高約262.5mで検出した。

VI層(南29、西20)・VII層(南13・14・30・31、西21・22)は自然堆積層であり、遺物は出土していない。VI・VII層はともにオリブ色がかかる黒褐色粘土が主体で、グライ化が顕著であることから地下水位の高さが伺える。特にVI層は大量の植物繊維を含む泥炭質で、植物繊維が分解途上であることから長期間の水没が考えられる。現地表下約100cmの標高約262.4mが調査区における現代の恒常的な地下水位と推定され、本発掘調査時においてもVI層以下で湧水が特に著しい。VII層は均質で非常に締まりの良い黒褐色粘土である。

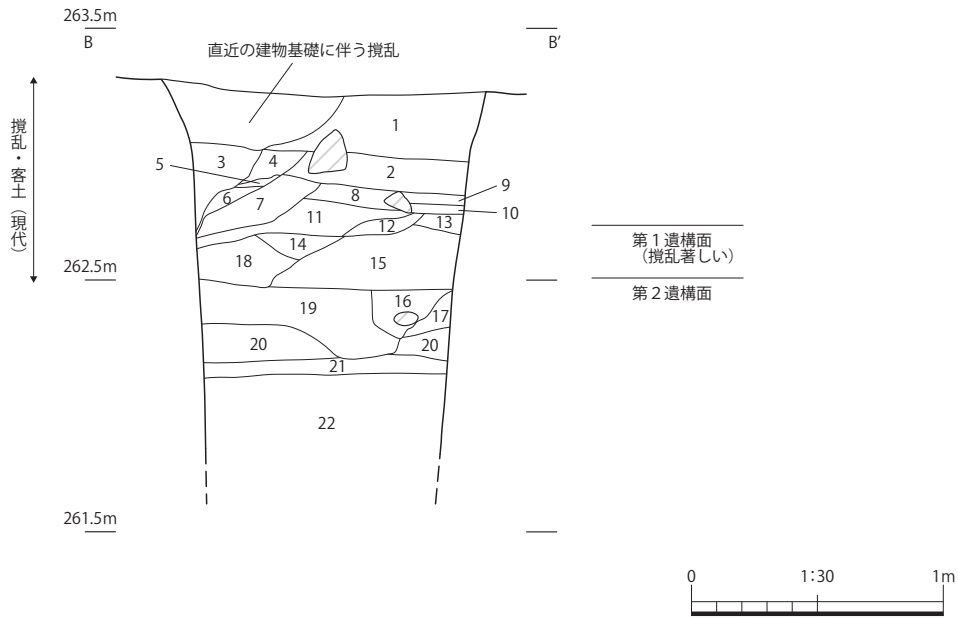


第3図 基本層序(概略)



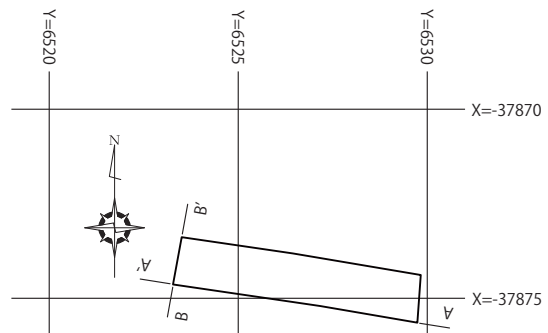
- 南壁
- 1 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土・炭化物を多量含む [戦災焼土層]
 - 2 1層と同一 瓦片を多量含む [戦災焼土層]
 - 3 暗褐色(10YR3/4)粘土 灰塵・焼土粒・炭化物を少量含む、油分・油臭が目立つ 良く締まる [廃棄堆積層(現代)]
 - 4 暗褐色(7.5YR3/3)粘土(やや砂質) 灰塵・焼土ブロック多量、炭化物を極微量含む、油分・油臭が目立つ 良く締まる [廃棄堆積層(現代)]
 - 5 黒褐色(10YR3/1)粘土 灰塵・焼土ブロック・炭化物を多量含む、油分・油臭が目立つ 良く締まる [廃棄堆積層(現代)]
 - 6 黒褐色(7.5YR3/2)粘土 焼土ブロックを少量含む 良く締まる [整地层(近代)]
 - 7 黒褐色(7.5YR3/1)粘土 焼土粒を微量含む 締めり弱い [廃棄場(近代)]
 - 8 黒褐色(10YR3/2)粘土(やや砂質) 褐色(10YR4/4)粘土ブロックを極微量含む [廃棄場(近代)]
 - 9 暗褐色(10YR3/4)粘土 褐色(10YR3/3)粘土ブロックを多量含む 良く締まる [廃棄場(近代)]
 - 10 黒褐色(7.5YR3/2)粘土(やや砂質) 焼土ブロックを多量、炭化物を微量含む 締めり弱い、[廃棄場(近代)]
 - 11 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土 褐色(10YR4/4)細粒砂が珪に混じる 締めり弱い、[廃棄場(近代)]
 - 12 暗褐色(10YR3/4)粘土 焼土ブロック・炭化物を多量含む 良く締まる
 - 13 黒褐色(10YR3/3)粘土 非常に良く締まる [自然堆積層]
 - 14 黒褐色(10YR3/2)粘土 非常に良く締まる [自然堆積層]
 - 15 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を極微量含む 締めり弱い、[整地层(近代)]
 - 16 黒褐色(10YR3/2)粘土(やや砂質) 焼土粒・炭化物を多量含む [整地层(近代)]
 - 17 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を極微量含む 締めり弱い、[整地层(近代)]
 - 18 黒褐色(10YR3/2)粘土(やや砂質) 炭化物を極微量含む 良く締まる
 - 19 灰褐色(7.5YR4/2)粘土(やや砂質) 褐色(10YR4/4)細粒砂・褐灰色(7.5YR6/1)粘土が極微量混じる 良く締まる
 - 20 暗赤褐色(5YR3/2)粘土 炭化物を極微量含む 良く締まる
 - 21 極暗褐色(7.5YR2/3)粘土 良く締まる
 - 22 黒褐色(10YR3/1)粘土 炭化物を極微量含む 良く締まる [整地层(近代)]
 - 23 黒褐色(7.5YR3/1)粘土 非常に良く締まる [SS1]
 - 24 褐灰色(10YR4/1)極細粒砂 白色極細粒砂が微量混じる 締めりなし [SS1]
 - 25 暗赤灰色(2.5Y3/1)粘土 炭化物を微量含む、暗褐色(7.5YR3/1)粘土が極微量混じる 非常に良く締まる
 - 26 暗オレンジ褐色(2.5Y3/3)粘土 焼土粒・炭化物を極微量含む 締めり弱い
 - 27 黒褐色(10YR3/1)粘土 炭化物を微量含む 締めり弱い
 - 28 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を極微量含む 締めり弱い
 - 29 黒褐色(10YR3/1)粘土 植物繊維を多量含む泥炭質で、暗褐色(10YR3/3)粘土が微量混じる 非常に良く締まる [自然堆積層]
 - 30 黒褐色(10YR3/1)粘土 灰白色(10YR7/1)粘土が斑に微量混じる 良く締まる [自然堆積層]
 - 31 黒褐色(10YR3/2)粘土 非常に良く締まる [自然堆積層]

第4図 基本層序(1)南壁



西壁

- 1 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土ブロック・炭化物を多量、径10mm未満の小礫を極微量含む 良く締まる [攪乱(現代)]
- 2 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を多量、瓦片を微量含む 良く締まる [整地層(現代)]
- 3 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を少量、径10mm未満の小礫を極微量含む 締まり弱い [攪乱(現代)]
- 4 暗青灰色(5B4/1)粘土 焼土粒・炭化物を微量含む、ガラス片が見られる 非常に良く締まる [攪乱(現代)]
- 5 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を微量含む、植物根の伸入が見られる [攪乱(現代)]
- 6 黒褐色(10YR3/1)粘土 焼土粒・炭化物を少量含む 良く締まる [攪乱(現代)]
- 7 暗赤褐色(2.5YR3/2)粘土 焼土粒・炭化物を極多量含む 良く締まる [攪乱(現代)]
- 8 暗褐色(10YR3/2)粘土(やや砂質) 焼土ブロック・炭化物を少量含む(層上部に集中する) 良く締まる [整地層(近代)]
- 9 暗褐色(10YR3/2)粘土(やや砂質) 焼土ブロック・炭化物を少量含む [整地層(近代)]
- 10 灰褐色(5YR4/1)粘土 炭化物を極微量含む 良く締まる [整地層(近代)]
- 11 にぶい褐色(7.5YR5/4)粗粒砂 径10~40mmの小礫を微量含む、褐色(10YR4/6)粘土と褐色(10YR5/1)粘土が斑に混じる 良く締まる [攪乱(近代)]
- 12 褐色(10YR5/1)粘土 炭化物を極微量含む、褐色(10YR4/6)粘土が混じる 良く締まる [攪乱(近代)]
- 13 褐色(10YR5/1)粘土 褐色(10YR4/6)粘土が多量混じる 良く締まる [整地層(近代)]
- 14 褐色(10YR4/1)粘土 にぶい褐色(7.5YR5/4)粗粒砂が多量混じる 良く締まる [攪乱(近代)]
- 15 褐色(7.5YR4/1)粘土 拳大の礫を多量含む、黄褐色(10YR5/6)粘土が斑に混じる 良く締まる [整地層(近世)]
- 16 褐色(10YR4/1)粘土 拳大の礫を多量含む、褐色(10YR4/6)粘土が多量混じる 良く締まる [整地層(近世)]
- 17 褐色(10YR4/1)粘土 良く締まる [整地層(近世)]
- 18 黒褐色(10YR3/1)粘土 炭化物を極微量含む 良く締まる
- 19 褐色(10YR4/1)極粗粒砂 白色極粗粒砂が微量混じる 締まりなし [SS1]
- 20 黒褐色(10YR3/1)粘土 植物繊維を多量含む泥炭質で、暗褐色(10YR3/3)粘土が微量混じる 非常に良く締まる [自然堆積層]
- 21 黒褐色(10YR3/1)粘土 灰白色(10YR7/1)粘土が斑に微量混じる 良く締まる [自然堆積層]
- 22 黒褐色(10YR3/2)粘土 非常に良く締まる [自然堆積層]



第5図 基本層序(2)西壁

第4章 調査の成果

調査では、遺構として土坑1基、小穴5基、石列1条、性格不明遺構1基が検出された。遺物としては18世紀末から20世紀にかけての土器、陶器、磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品が、プラスチックコンテナ(59×38×20cm)にして3箱分が検出された。

第3章第2節で述べたように、後世の開発行為に伴う攪乱・削平・客土が調査区随所に及んでいたことから、生活面としての安定した堆積は一部のみであったが、遺構面として2つ時期を把握することができた。各遺構面を節立てし、検出された遺構・遺物について記す。

第1節 第1遺構面

第1遺構面は、戦前から現代にかけ著しい攪乱を受けるとともに、遺構上部の削平と客土も見られ、包含層の多くは消失していた。遺構検出作業はこれらの攪乱と客土を除去した直下の、近代の整地土・客土上面で行い、第1遺構面からは4基の小穴が検出された。このうちの3基は同軸上に並び、沈下防止材と推定される礫や、厚手の土器・陶器の破砕片が覆土に含まれるという共通点が見られるため、同一の建物を構成する柱跡と推定される。

Pit 1 (建物柱跡) (第6・8・11図、図版1・4)

[位置・重複] グリッドB-6、C-6。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は1辺40cmの隅丸方形をし、断面形状は逆台形で深さ23cmを測る。

[検出状況・覆土] 近代客土より検出され、遺構中心部を基点にPit 2、3とは1間(約180cm)の間隔でN-84°-Wを主軸に並ぶ。覆土上層は暗褐色粘土主体で焼土・炭化物を少量含み良く締まり、下層は締まりの弱い灰色粘土に拳大の礫と破砕した厚手の瀬戸美濃系陶器が含まれる。

[出土遺物] 瀬戸美濃系の捏鉢(報告番号1)のほか、陶器・磁器細片が出土している。

[時期] 検出状況、出土遺物より近代である。

Pit 2 (建物柱跡) (第6・8・11・12図、図版1・4)

[位置・重複] グリッドC-4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸50cm短軸40cmの隅丸方形をし、断面形状は椀形で深さ24cmを測る。

[検出状況・覆土] 近代客土より検出され、遺構中心部を基点にPit 1、3とは1間(約180cm)の間隔でN-84°-Wを主軸に並ぶ。覆土上層は暗褐色粘土主体で良く締まり、少量の焼土・炭化物とともに径5cm程の礫や瓦質土器片が含まれる。下層は締まりの弱い暗灰色粘土で、遺構底部には破砕した瓦質土器が含まれる。この瓦質土器片はPit 3下層に含まれるものと同一個体である。

[出土遺物] 焜炉型の瓦質土器(2上部)、磁器(3・4・5)、石板(6)を図化したほか、土器片・磁器片が出土している。

[時期] 検出状況、出土遺物より近代である。

Pit 3 (建物柱跡) (第6・8・12図、図版1・2・4)

[位置・重複] グリッドC-2・C-3。重複する遺構はない。

[形状・規模] 長軸55cm短軸50cmを測る。遺構外へ延伸するため平面形状は不明だが、不整の隅丸の台形が推定される。断面形状は箱形で深さ18cmを測り、片側にのみ小段が見られる。

[検出状況・覆土] 近代客土より検出され、北側調査区外へ延伸する。想定される遺構中心部を基点にPit 1、2とは1間(約180cm)の間隔でN-84°-Wを主軸に並ぶ。覆土上層は暗褐色粘土主体で焼土・炭化物を少量含む。下層は締まりの弱い暗褐色粘土で、拳大の礫と破砕した瓦質土器が含まれる。この瓦質土器片はPit 2底部に含まれるものと同一個体である。

[出土遺物] 焜炉型の瓦質土器(2下部)、焜炉(7)、磁器(8)のほか、磁器片1点が出土した。

[時期] 検出状況、出土遺物より近代である。

Pit 4 (第6・8図、図版1・2)

[位置・重複] グリッドC-3。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は長軸55cm短軸40cmを測る不整楕円形をし、断面形状は不整な楕形で深さ16cm。

[検出状況・覆土] 近代客土中より検出された。覆土はにぶい赤褐色極粗粒砂で、径1～2cmの礫を含む。

[出土遺物・時期] 出土遺物は無いが、検出状況から近代と推定する。

第2節 第2遺構面

第2遺構面の検出作業は地山上面で行い、土坑1基、小穴1基、廃棄土坑1基、水路石列1条が検出された。また、SX1の覆土より採取した土壌試料の科学分析を行っている。

SK 1 (第7・8図、図版2・3)

[位置・重複] グリッドC-3。重複する遺構はない。

[形状・規模] 一部調査区外へ延伸するが、平面形状は長軸114cm短軸96cmの楕円形と推定する。断面形状は皿形で深さ17cmを測るが、遺構上部は削平され消失している。

[検出状況・覆土] 地山上面より検出された。覆土上層は暗褐色粘土を主体とし極微量の炭化物を含む。下層は暗灰色の粘土であるが、遺構底部は鉄分が酸化し硬化面を成す。

[出土遺物・時期] 出土遺物は無いが、検出状況から近世と推定する。

Pit 5 (第7・10図、図版2・3)

[位置・重複] グリッドB-4・B-5・C-4・C-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 長軸48cm短軸22cmを測る。調査区外へ延伸するため平面形状は不明だが、円形と推定する。断面形状は逆台形で深さ24cmを測る。

[検出状況・覆土] 地山上面より検出された。覆土は主に黒褐色粘土であるが、上層のみやや砂質で径10mm未満の小礫を含む。

[出土遺物・時期] 出土遺物は無いが、検出状況から近世と推定する。

SX 1 (廃棄土坑) (第7・9・12～17図、図版2～5)

[位置・重複] グリッドC-1・C-2・D-1・D-2。重複する遺構はない。

[形状・規模] 調査区外へ延伸するため平面形状は不明だが、長軸140cm短軸74cm深さ76cmで検出された。遺構底部の形状から、平面円形で断面掘鉢形と推測する。

[検出状況・覆土] 近現代の廃棄堆積直下より検出された。覆土は黒褐色粗粒砂・細粒砂が主体であるが、特に中層以下に加工木や木削屑が集中する。廃棄物の処分に用いられた遺構と考えられ、これらの廃棄物を上層部の黒色粘土で覆い隠す意志が伺える。

[出土遺物] 調査で出土した遺物総数の8割を占める。18世紀末から19世紀の陶磁器が主体であるが、「丸輪に泉」墨書の木札(36)、箱の一部(38)、炭化した建物部材(48)等計44点を図化した。

[時期] 出土遺物より近世である。

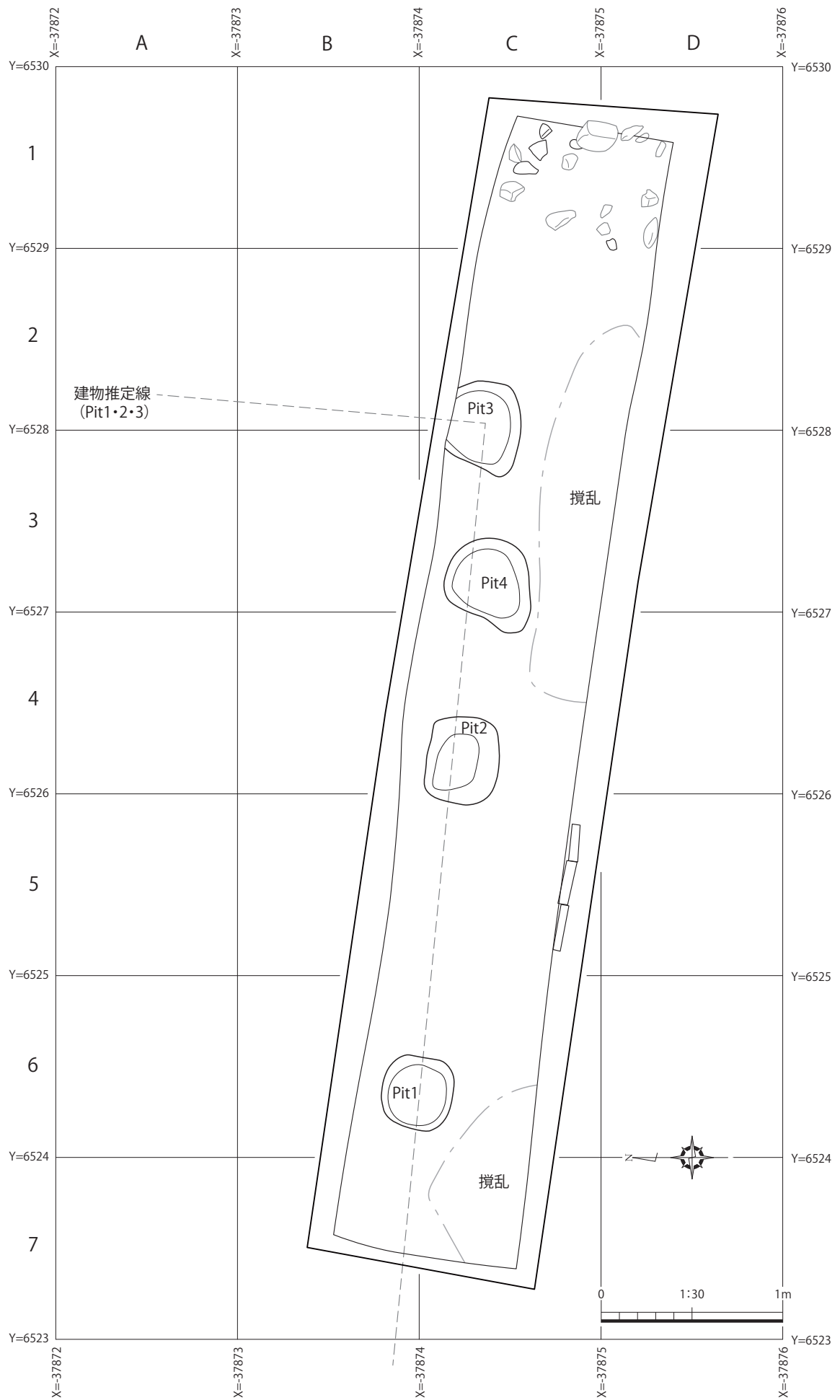
SS 1 (水路石列) (第7・10・18図、図版2・3・5)

[位置・重複] グリッドD-4～C-7。重複する遺構はない。

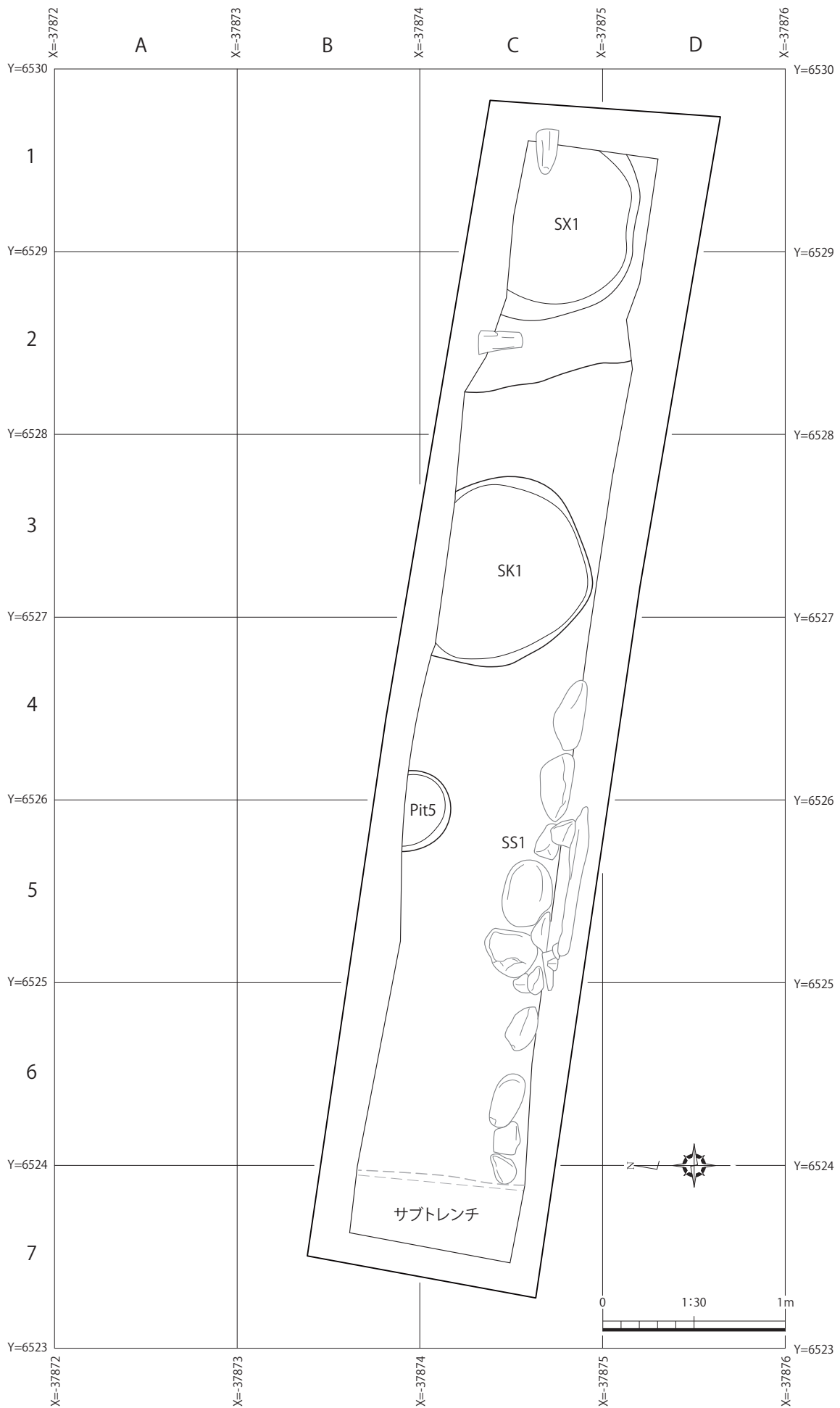
[規模・検出状況・覆土] N-84°-Wを主軸とする石列で、主に長軸20～40cmの礫で構成され、礫脇に木杭が打たれる。長さ2.8mが検出されたが、南・西側調査区外へ延伸する。調査区内で検出されたのは石列部分のみだが、実際は調査区外に中心軸をもつ水路状の遺構であり、調査区南壁中より水路覆土である極粗粒砂層と、対応する石列を確認している。

[出土遺物] 出土遺物は灯明受皿(53)のみだが、桶側板を転用した木杭2点(54・55)を図化した。

[時期] 検出状況、出土遺物より近世と推定する。

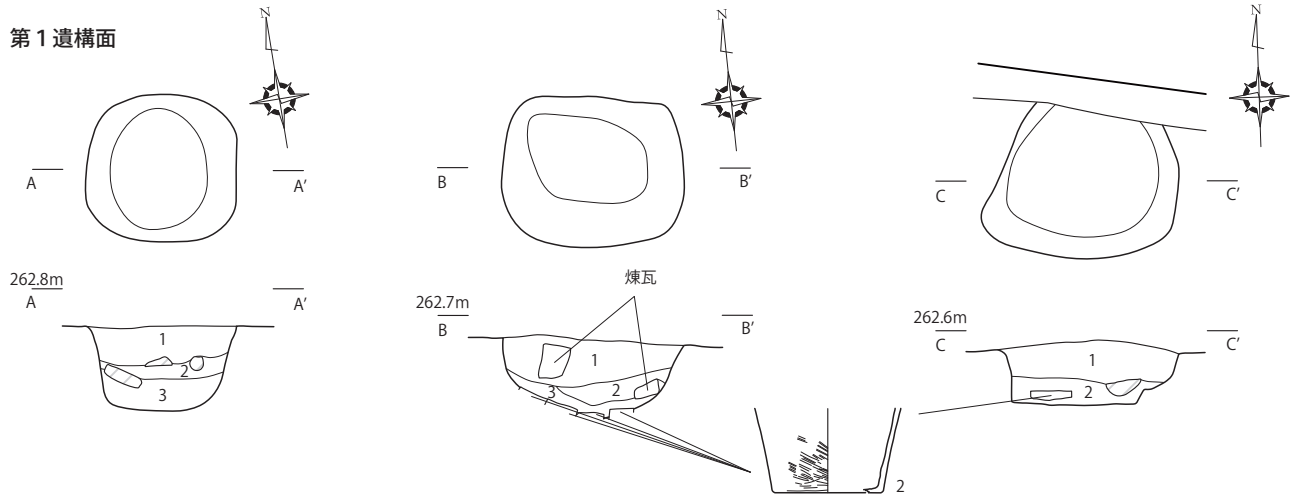


第6図 全体図(1)第1遺構面



第7図 全体図(2)第2遺構面

第1遺構面



Pit1

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
焼土粒・炭化物を少量含む
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 灰色 (N4/0) 粘土
拳大の礫が充填される
締まり弱いが非常に粘性が強い
- 3 灰色 (N4/0) 粘土
破碎した瀬戸美濃系の陶器が充填される
締まり弱いが非常に粘性が強い

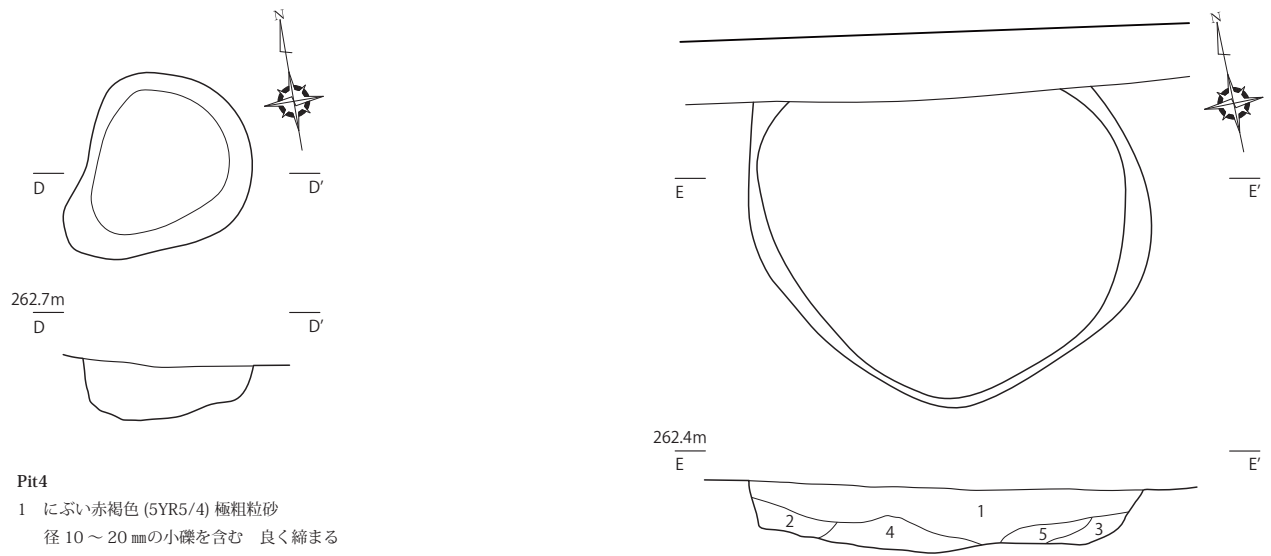
Pit2

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
焼土粒・炭化物を少量含む
径 50 mm以下の礫・瓦片・磁器片を含む
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘土 締まり弱い
- 3 暗灰色 (N3/0) 粘土
底部に破碎した瓦質土器片が散かれる 締まり弱い

Pit3

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
焼土粒・炭化物を少量含む
にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土が斑に混じる
層下部に植物根が多くみられる
良く締まる
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
拳大の礫・破碎した瓦質土器片が充填される
締まり弱い

第2遺構面

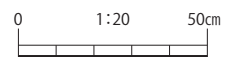


Pit4

- 1 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 極粗粒砂
径 10 ~ 20 mmの小礫を含む 良く締まる

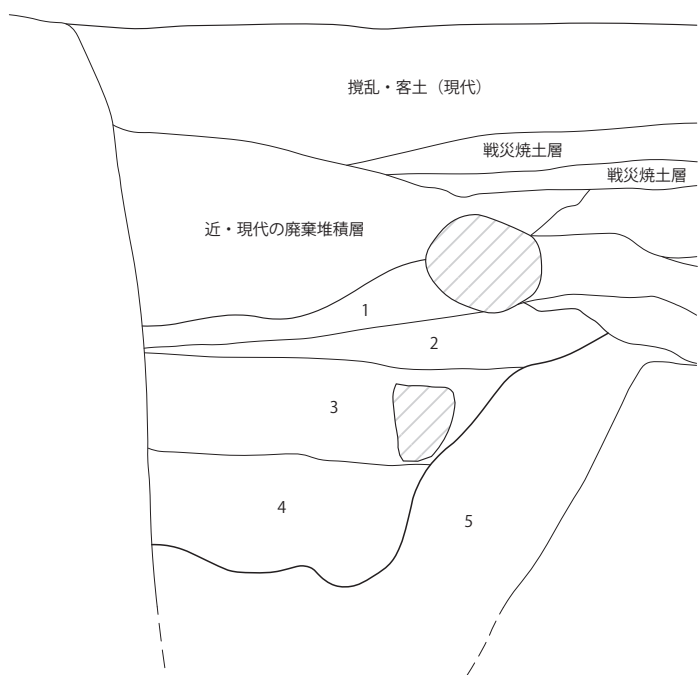
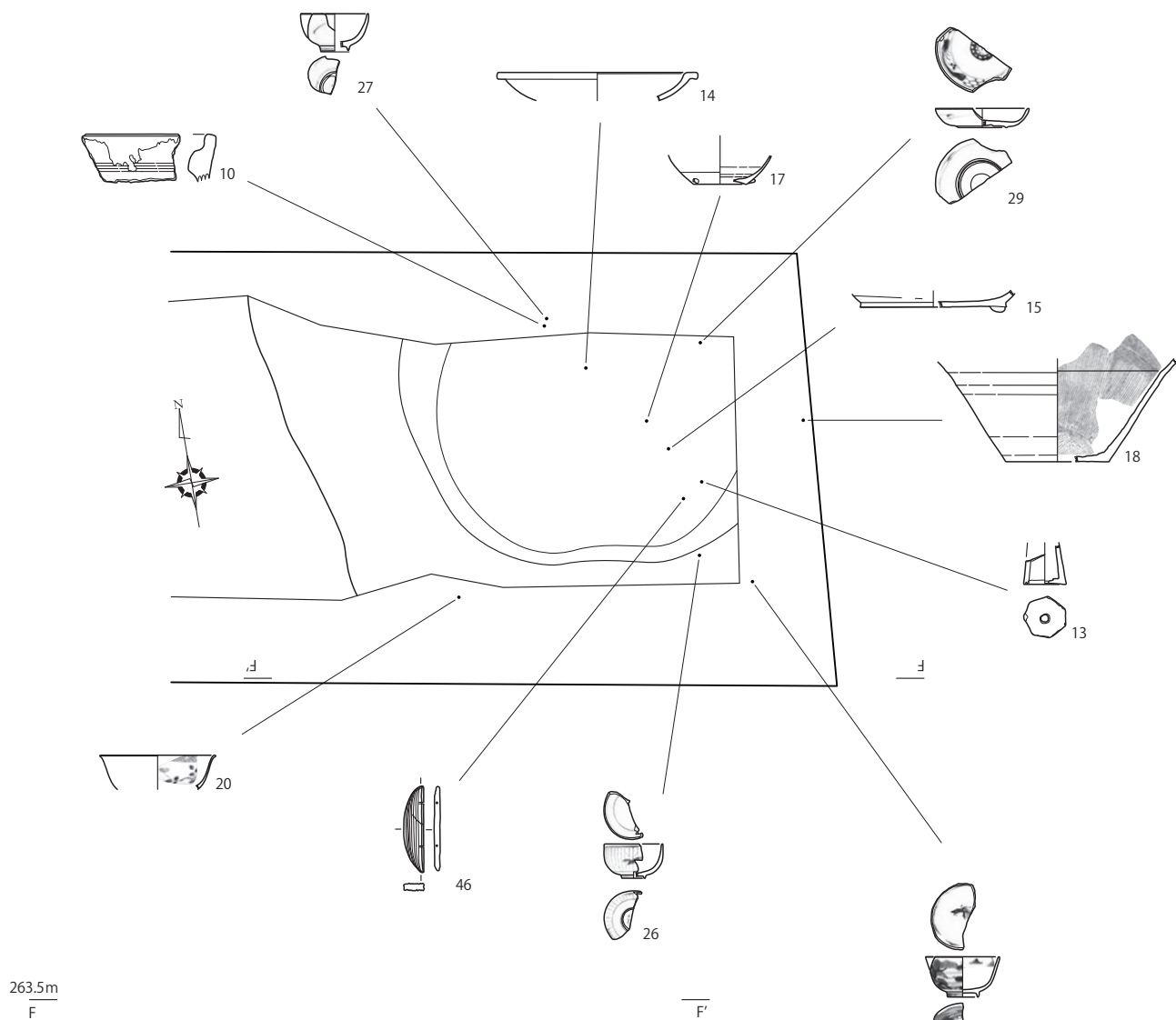
SK1

- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘土 炭化物を極微量含む
にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土が斑に混じる 締まり弱い
- 2 褐色 (10YR4/3) 粘土 暗褐色 (10YR3/3) 粘土が微量混じる 良く締まる
- 3 褐色 (10YR4/3) 粘土 暗褐色 (10YR3/3) 粘土が微量混じる 良く締まる
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘土 褐色 (10YR4/3) 粘土が微量混じる 良く締まる
- 5 褐灰色 (10YR4/1) 粘土 遺構底部は赤褐色に酸化鉄分が硬化している 良く締まる



第8図 遺構図(1)

第2遺構面

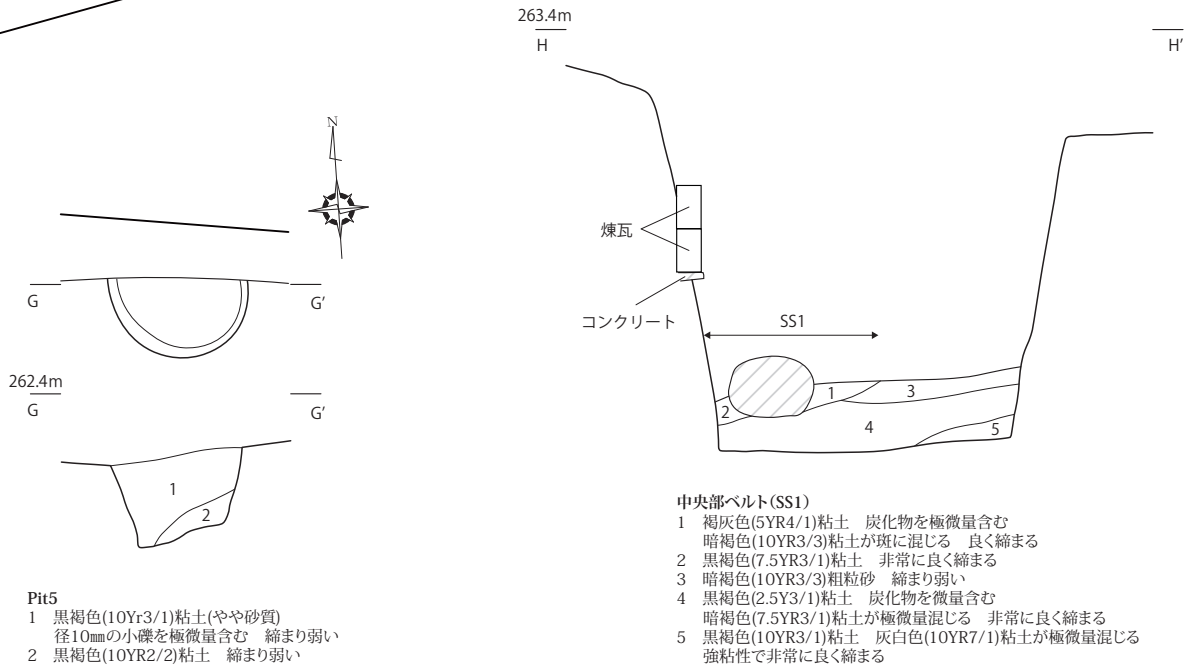
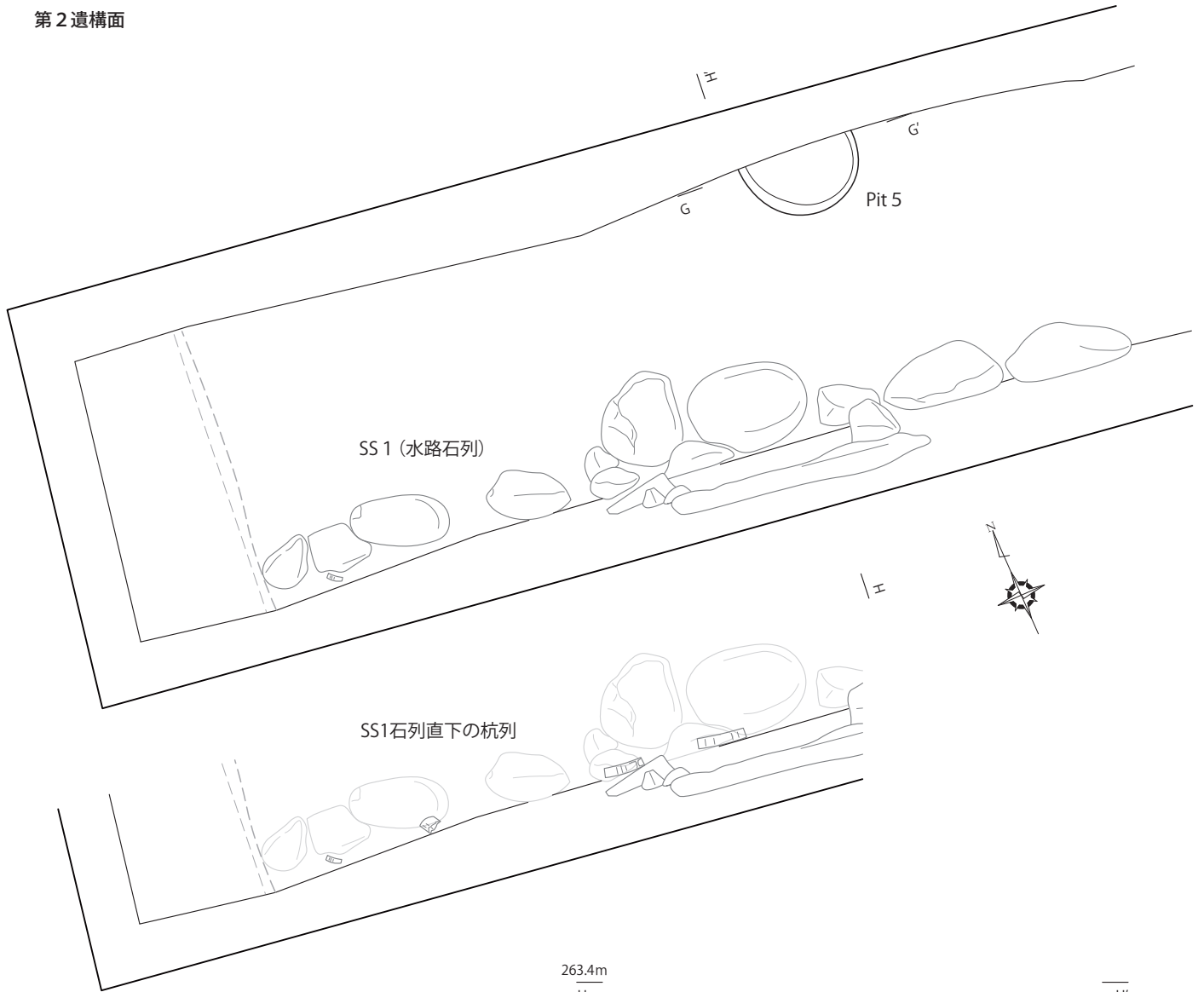


- SX1
- 1 黒色(10YR2/1)粘土と粗粒砂の混合土
炭化物・木片を多量含む やや締まる
 - 2 黒褐色(5YR3/1)粘土と細粒砂の混合土
炭化物を少量含む 締まり弱い
 - 3 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂と粘土の混合土
木削屑と炭化木片を多量含む 締まりなし
 - 4 黒色(10YR2/1)粗粒砂 層上部に木削屑が集中する 締まりなし
 - 5 黒褐色(10YR3/3)粘土 非常に良く締まる [自然堆積層]



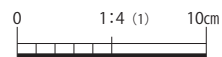
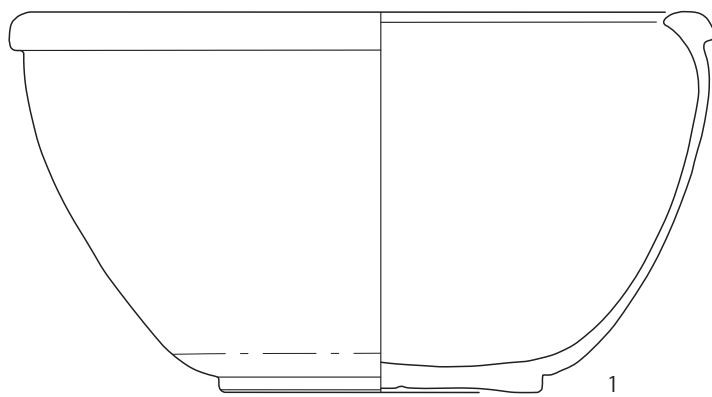
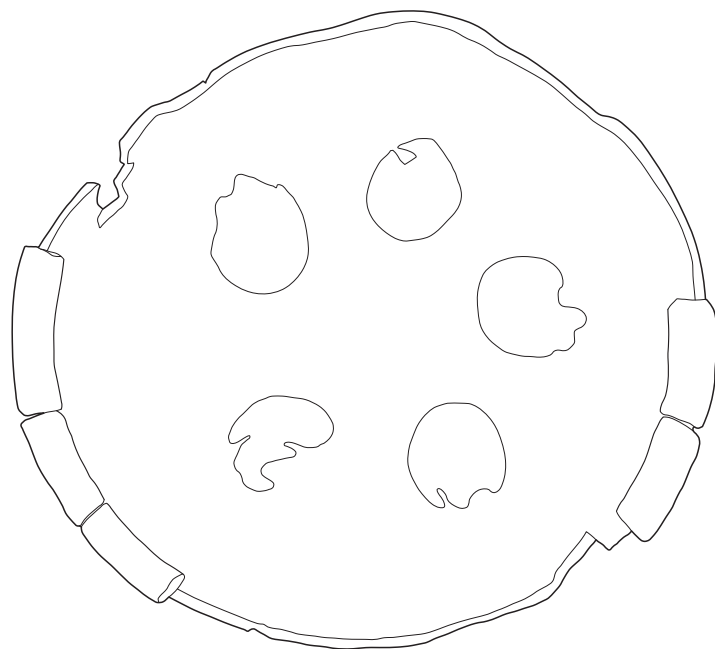
第9図 遺構図(2)

第2遺構面



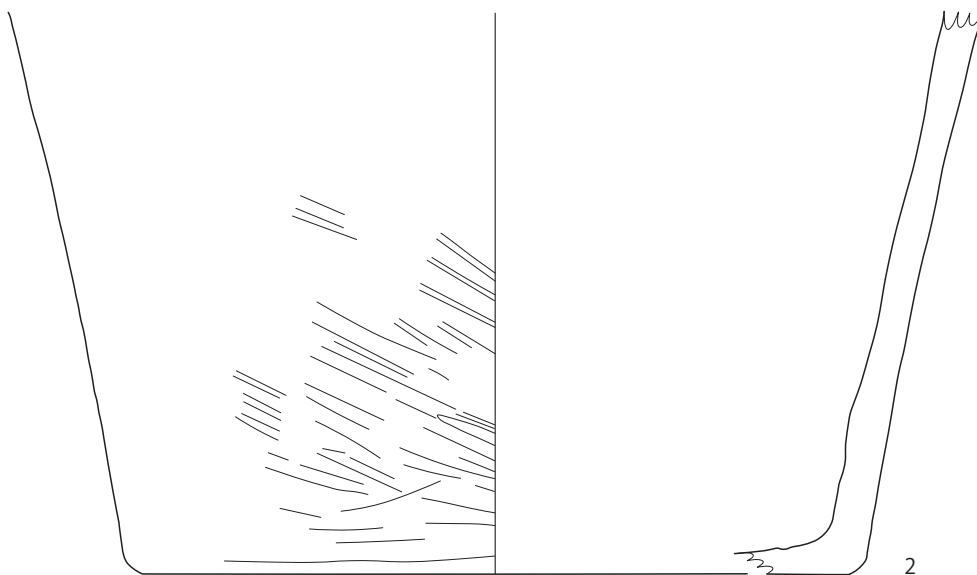
第10図 遺構図(3)

第1遺構面
Pit1

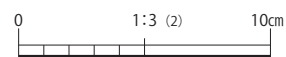


1

Pit2

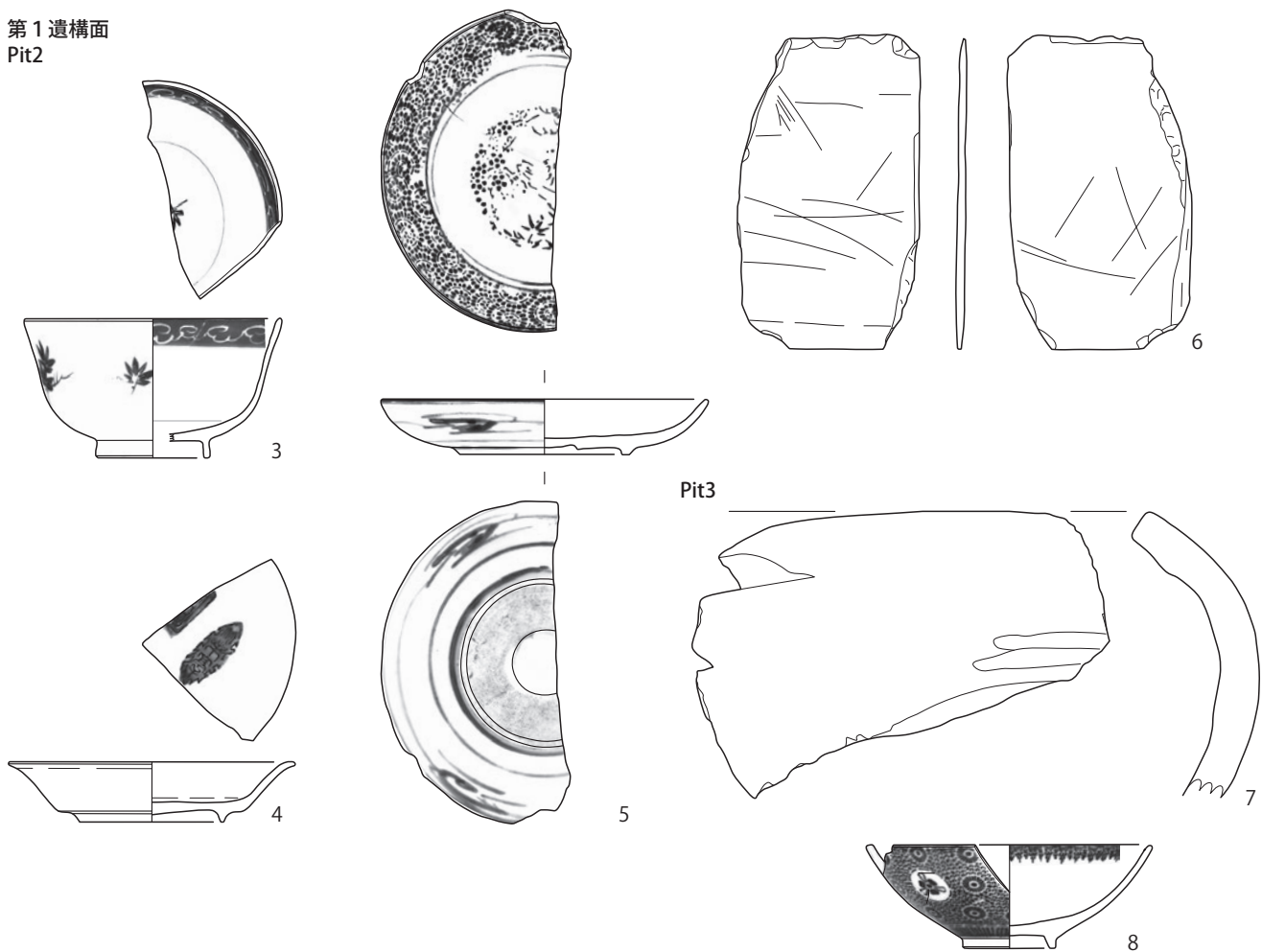


2

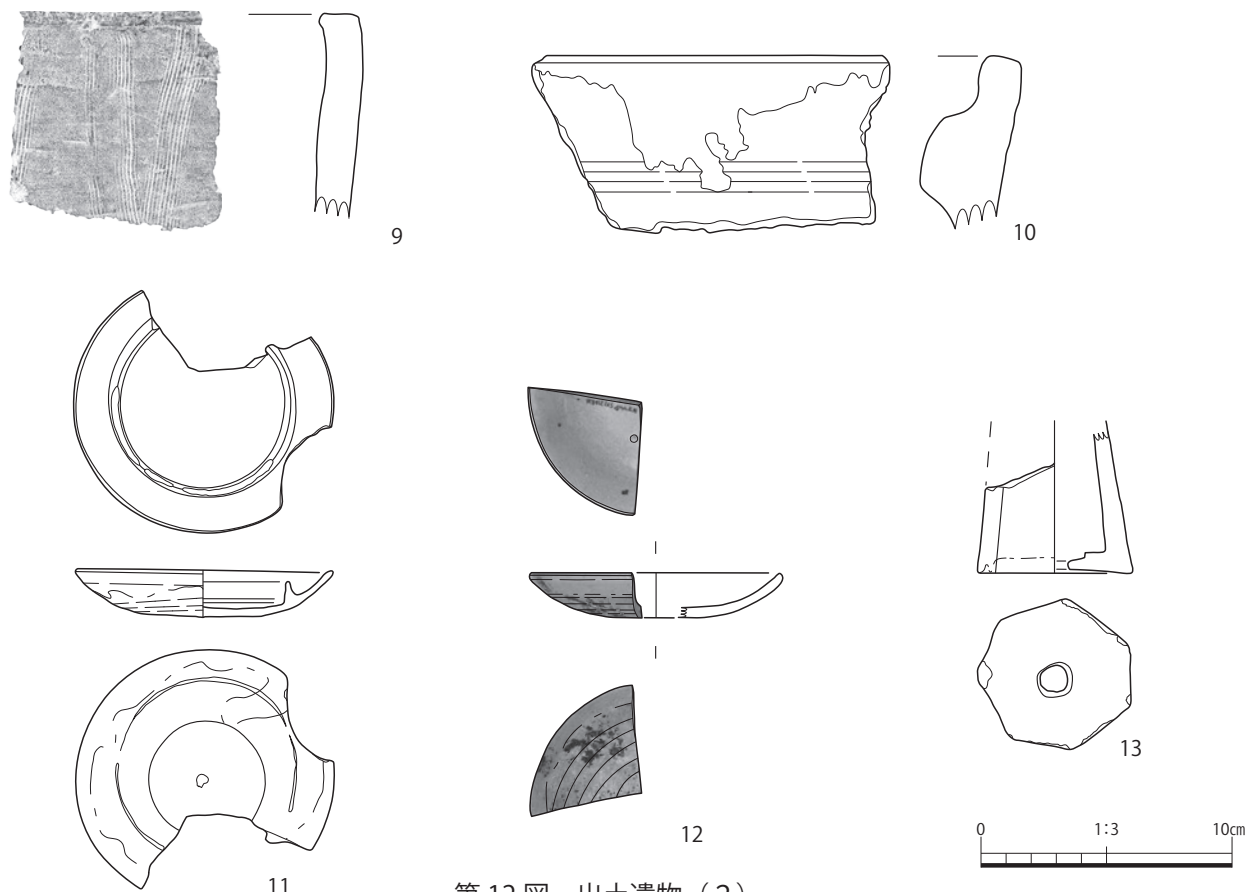


第11図 出土遺物(1)

第1遺構面
Pit2

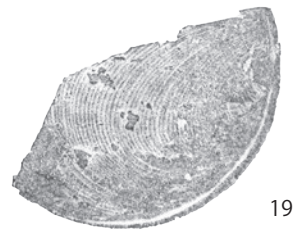
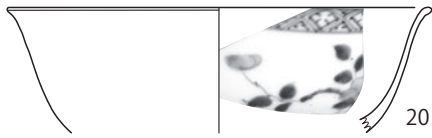
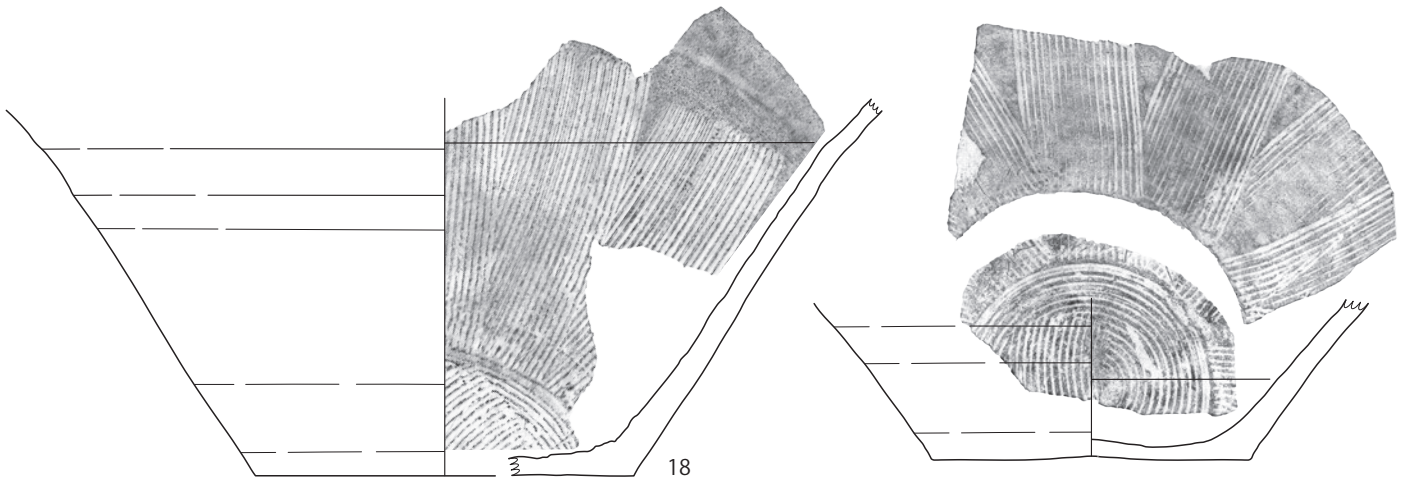
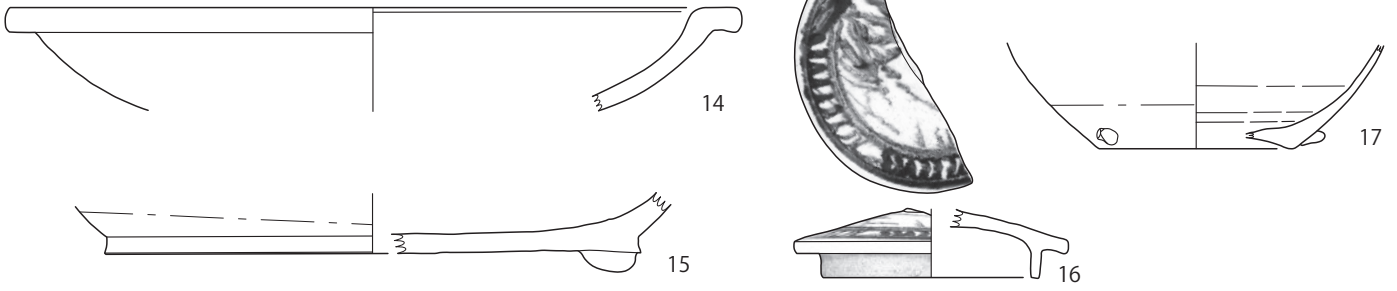


第2遺構面
SX1

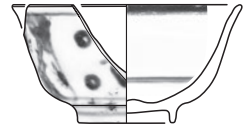
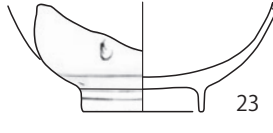
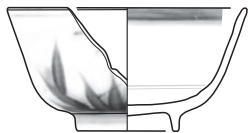
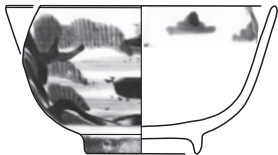
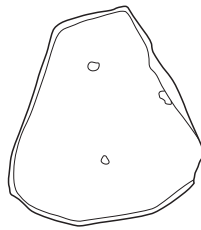
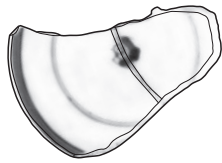
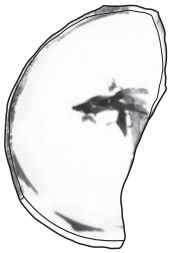


第12図 出土遺物(2)

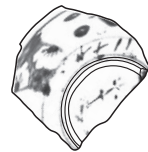
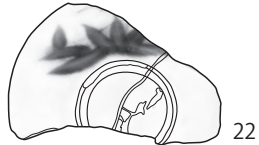
第2遺構面
SX1



19



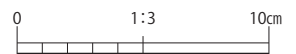
23



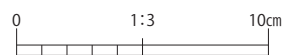
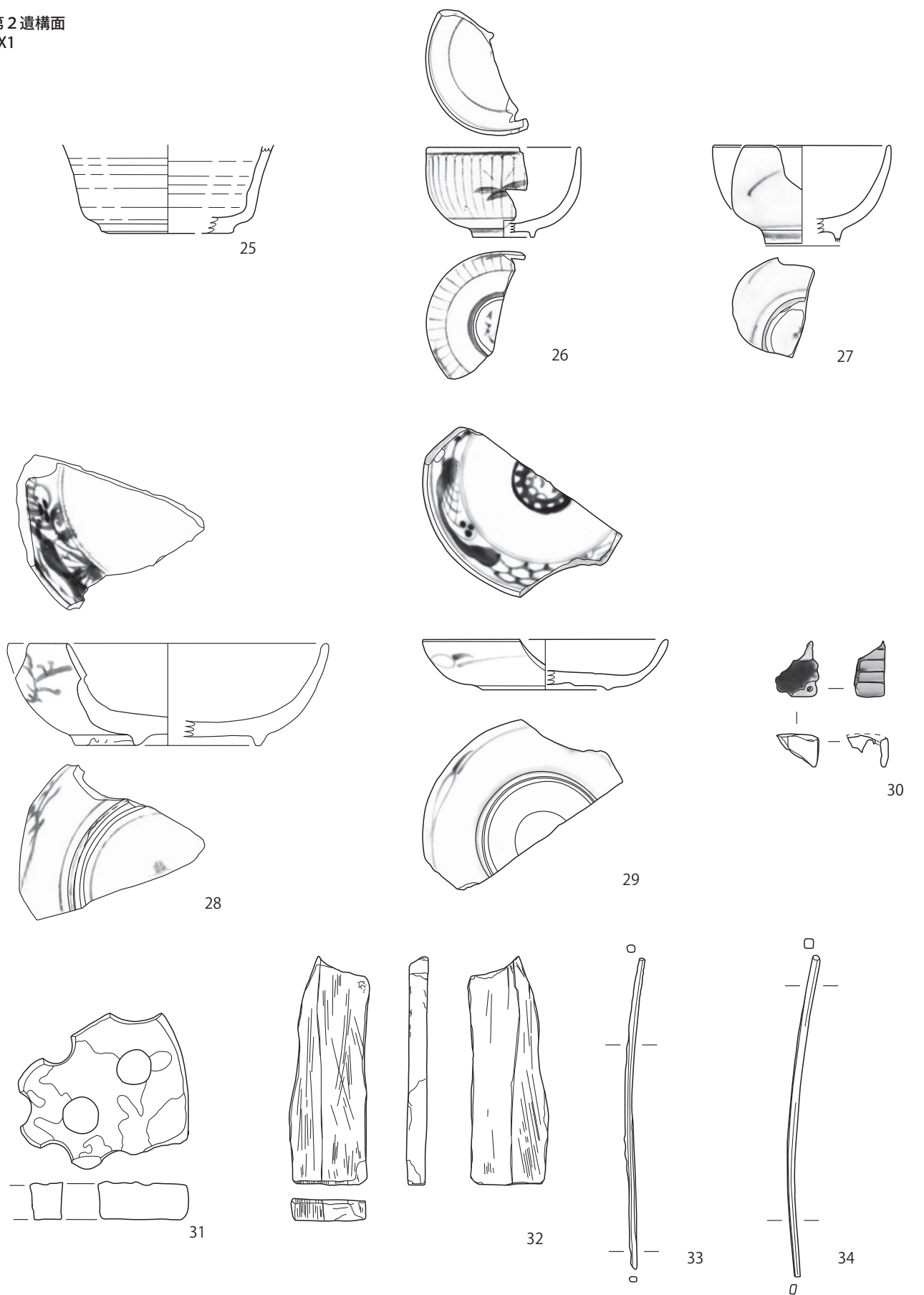
21

22

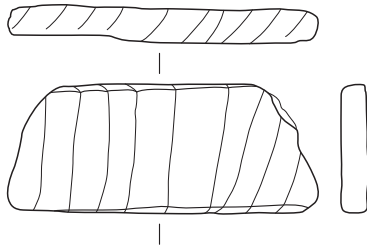
24



第13図 出土遺物(3)



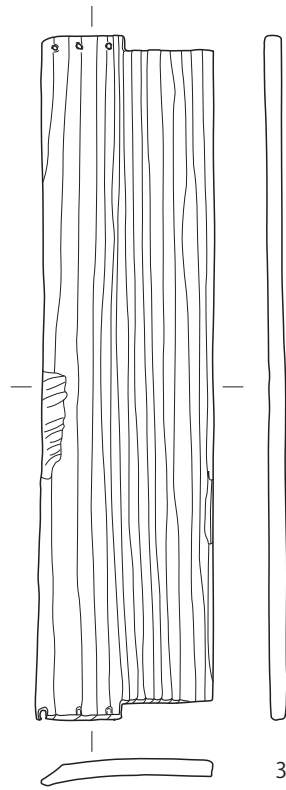
第14図 出土遺物(4)



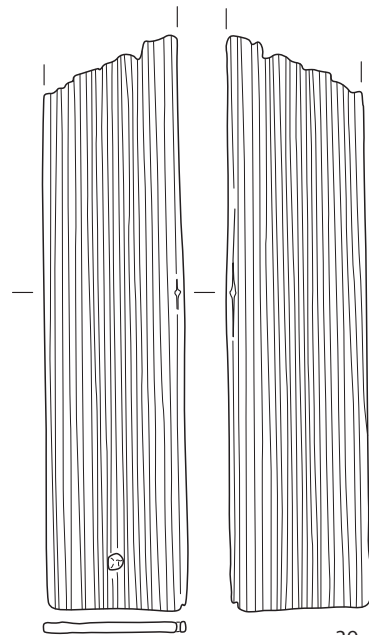
35



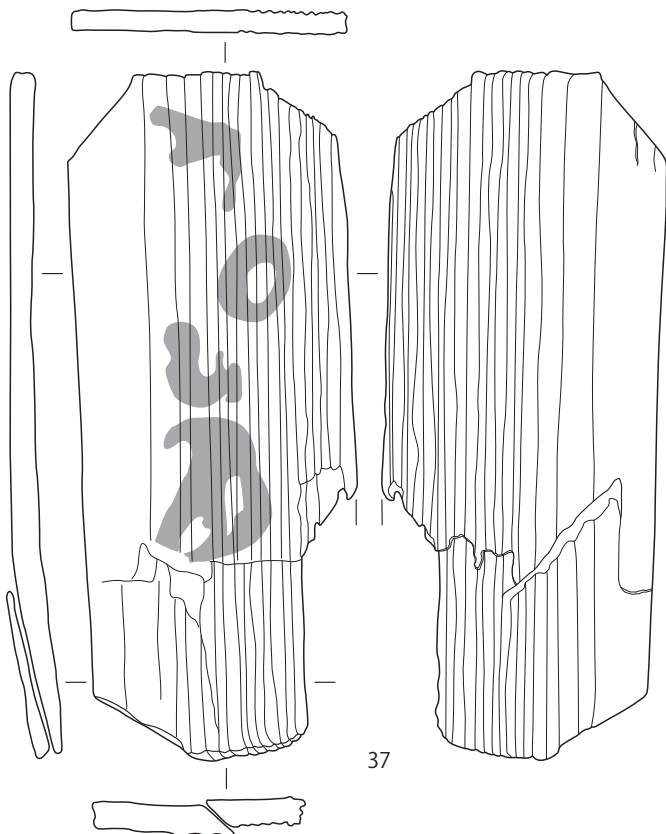
36



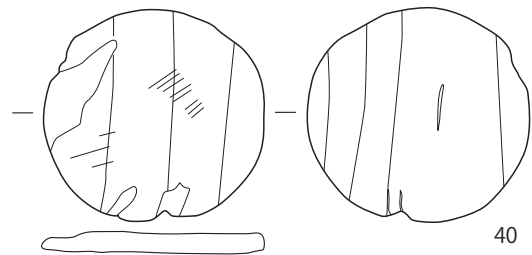
38



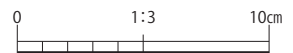
39



37

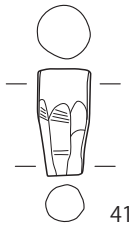


40

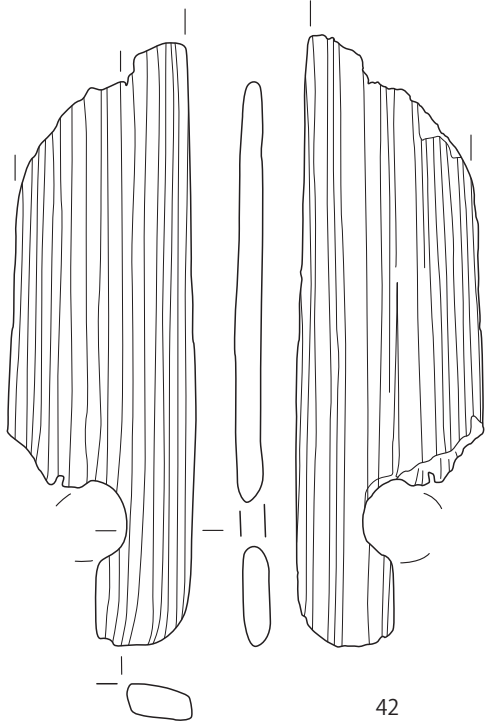


第15図 出土遺物(5)

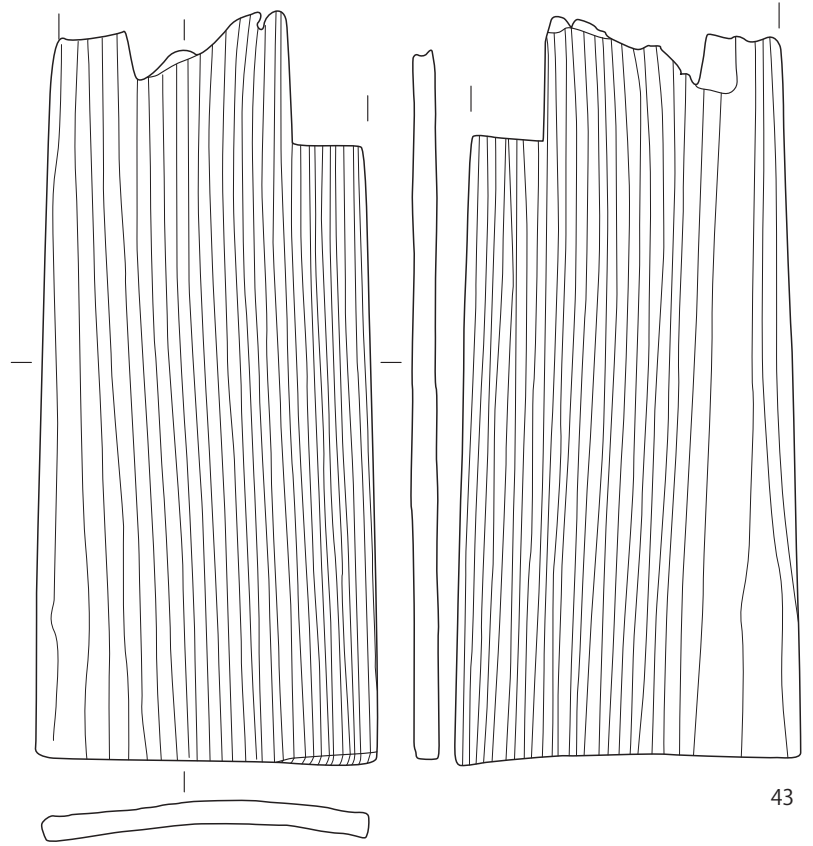
第2遺構面
SX1



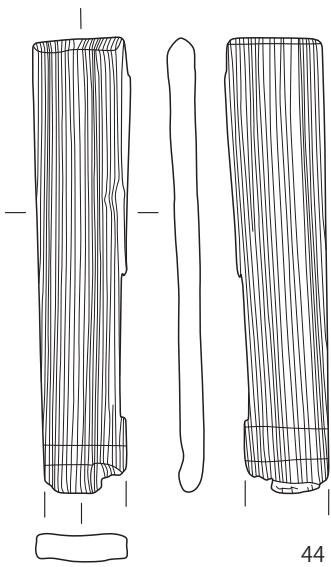
41



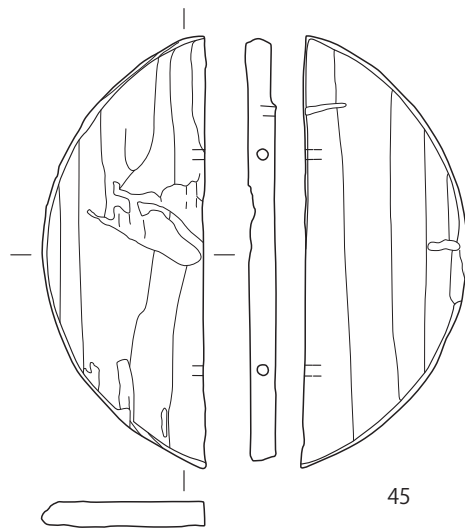
42



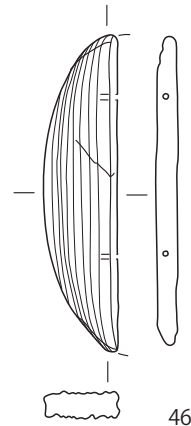
43



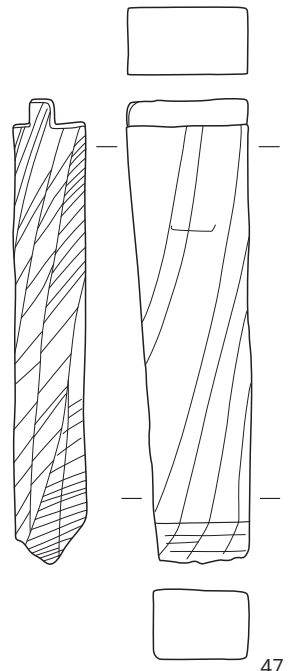
44



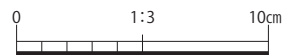
45



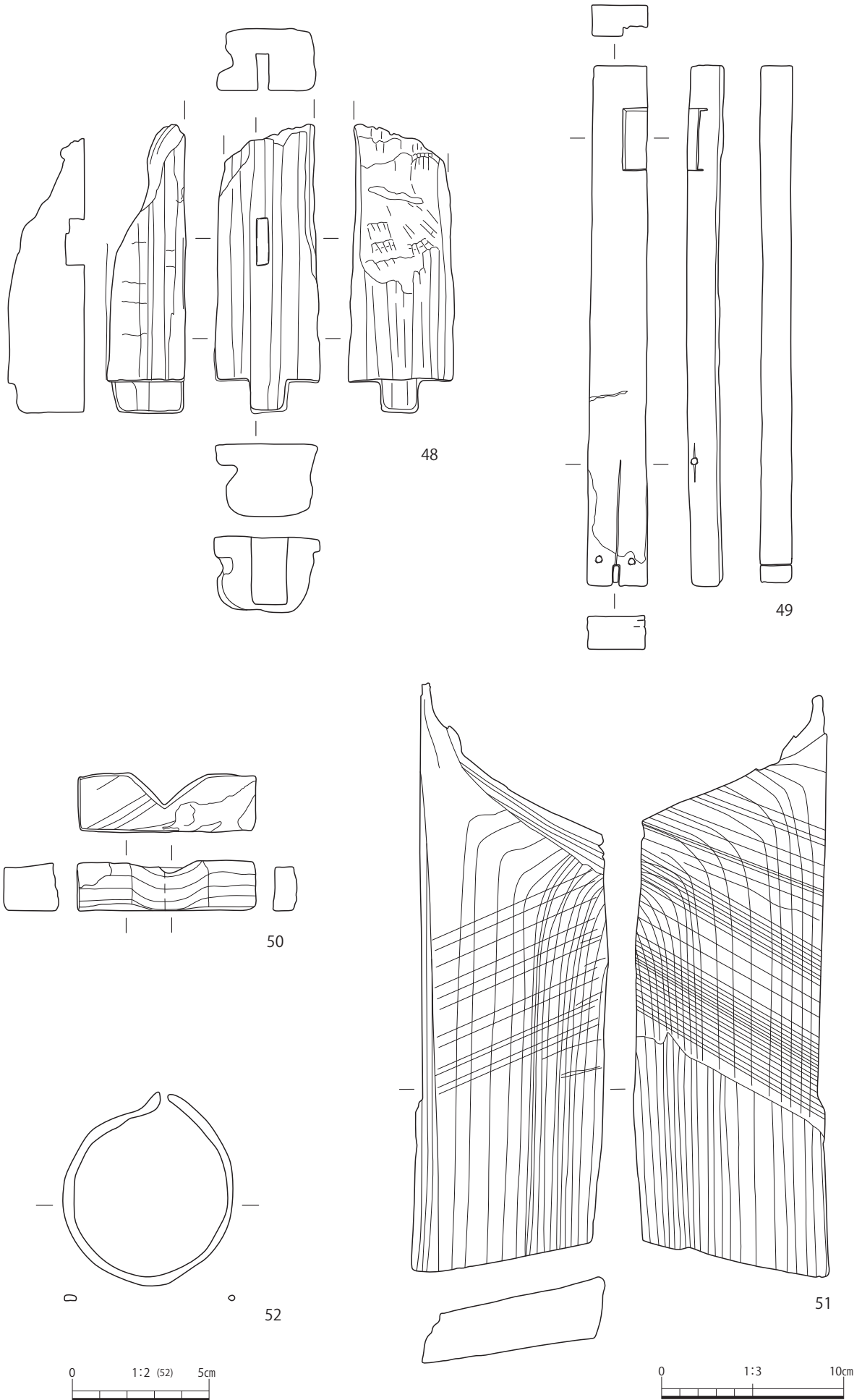
46



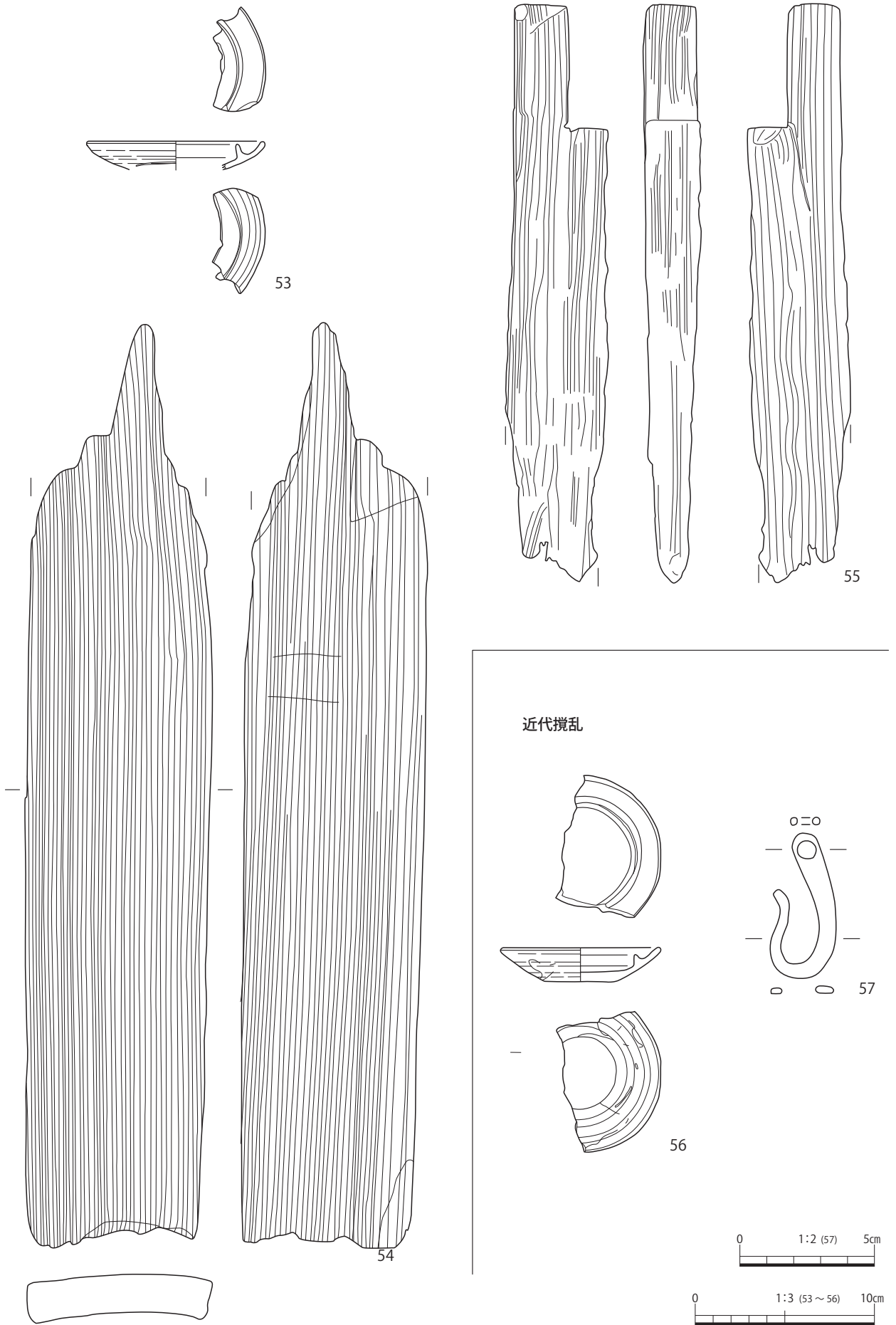
47



第16図 出土遺物(6)



第17図 出土遺物(7)



第18図 出土遺物(8)

第2表 遺物観察表(土器・陶器・磁器)

*法量()は測定値、〈 〉は残存値である。

報告 番号	挿図	写真 図版	出土地点	種別	器種	器形	法量(cm)				成形技法	絵付・装飾技法	特徴・備考	釉薬	釉調	胎土	胎土色調	含有物	焼成	推定産地	推定生産年代
							A	B	C	D											
1	11	4	Pr1	陶器	提鉢	罐筒形	(35.0)	16.6	20.1		輪襷整形後調整	見込みに目跡5か所	灰釉	灰黄 (2.5Y7/2)	密	密	浅黄橙 (10YR8/3)	白色小礫 白色燧石砂	良好	瀬戸美濃系	18世紀～19世紀
2	11	4	Pr2・3	土器	燈炉	罐筒形	(28.0)	(22.3)		外) 磨き	上部はPr2、下部はPr3より出土 内) 指頭痕、擦過痕(火割によるか)		透明釉		密	密	にふい橙 (5YR7/4)	白色中粒砂 褐色粒、雲母	良好		
3	12	4	Pr2	磁器	中碗	罐筒形	(10.6)	(4.6)	5.8	内外) 染付			透明釉		密	密	白	黒色粒	良好	肥前系	
4	12	4	Pr2	磁器	小皿	罐筒形	(12.0)	(6.0)	2.5	内) 染付、陰刻			透明釉		密	密	白	黒色粒	良好	肥前系	
5	12	4	Pr2	磁器	小皿	罐筒形	(13.4)	(7.0)	2.3		内) 型紙繪(外) 染付 蛇の目凹高台		透明釉		密	密	白	黒色粒	良好		
7	12	4	Pr3	土器	燈炉	罐筒形			(11.9)						密	密	にふい橙 (5YR7/4)	白色中粒砂	良好		
8	12	4	Pr3	磁器	中碗	罐筒形	(11.8)	(3.8)	4.3	内外) 型紙繪			透明釉		密	密	白	黒色粒	良好		
9	12	4	SX1	土器	燈炉	罐筒形			(8.1)	外) 縦刷毛目					密	密	灰黄橙 (10YR5/2)	白色燧石砂 雲母	良好		
10	12	4	SX1	土器	燈炉	罐筒形			(6.9)						密	密	にふい橙 (7.5YR5/3)	白色燧石砂	良好		
11	12	4	SX1	陶器	灯明受皿	罐筒形	(10.3)	(7.4)	1.9	底) 回転磨削り、環状痕			鉄釉	暗赤褐 (2.5YR3/6)	密	密	淡黄 (2.5Y8/3)	黒色粒	良好	瀬戸美濃系	18世紀末～19世紀
12	12	4	SX1	陶器	灯明皿	罐筒形	(10.0)	(3.2)	1.8				灰釉	灰黄 (2.5YR7/2)	密	密	灰黄 (2.5Y8/3)		良好	京信系	
13	12	4	SX1	陶器	瓶	罐筒形		6.2	(6.1)	輪襷後七方に整形	底) 中心部に外側からの刺突による円形の 穿孔があり瓶用に向える		灰釉	オリブ灰 (10Y6/2)	密	密	灰白 (5Y8/1)		良好		
14	13	4	SX1	陶器	皿	罐筒形	(29.0)		(4.1)				灰釉	明緑灰 (7.5GY7/1)	密	密	灰白 (7.5Y8/1)		良好	瀬戸美濃系	
15	13	4	SX1	陶器	火鉢	罐筒形		(21.4)	(3.3)	内) 鉄釉刷毛塗	有足、足内側筋にハリまえ痕		鉄釉	極暗赤褐 (2.5YR2/2)	密	密	灰白 (7.5Y8/2)	白色中粒砂	良好	瀬戸美濃系	
16	13	4	SX1	陶器	土瓶	罐筒形	(8.6)		(2.7)	外) 染付、陰刻			志野釉	白	密	密	灰白 (10YR8/2)	黒色粒	良好	瀬戸美濃系	
17	13	4	SX1	陶器	土瓶	罐筒形		(7.6)	(4.2)		有足		緑釉	暗緑灰 (7.5GY4/1)	密	密	灰白 (10Y8/1)		良好		
18	13	4	SX1	陶器	提鉢	罐筒形		(15.0)	(13.0)		1条20単位		鉄釉	暗褐 (7.5YR3/4)	密	密	浅黄橙 (10YR8/4)		良好		
19	13	4	SX1	陶器	提鉢	罐筒形		(12.5)	(12.6)		底部回転糸切痕、内面斜付蓋、1条18単位		鉄釉	暗赤褐 (5YR3/3)	密	密	灰白 (2.5Y8/2)	白色粒	良好		
20	13	4	SX1	磁器	中碗	罐筒形			(5.0)	内) 染付		内) 透明釉 外) 緑釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系		
21	13	4	SX1	磁器	中碗	罐筒形	(10.6)	(4.4)	5.9	内外) 染付	漆継、漆継印		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
22	13	4	SX1	磁器	中碗	罐筒形	(4.0)	(4.0)	4.9	内外) 染付	焼継、焼継印		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
23	13	4	SX1	磁器	中碗	罐筒形	(4.8)	(4.3)		内) 染付	見込みに目跡		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
24	13	4	SX1	磁器	小碗	罐筒形	(0.9)	(3.1)	4.7	内外) 染付	漆継、漆継印		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	瀬戸美濃系	
25	14	4	SX1	磁器	小碗	罐筒形	(6.6)	(4.9)				外) 緑釉		織密	織密	灰白 (10YR7/1)		良好			
26	14	4	SX1	磁器	小碗	罐筒形	(8.4)	(3.4)	5.0	内外) 染付	焼継、焼継印		透明釉		織密	織密	白		良好		
27	14	4	SX1	磁器	中碗	罐筒形	(9.8)		(5.5)	染付	輪花、高台内に印		透明釉		織密	織密	白		良好	肥前系	
28	14	4	SX1	磁器	中皿	罐筒形	(17.6)	(10.2)	5.7	内外) 染付			透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
29	14	4	SX1	磁器	中皿	罐筒形	(13.6)	(7.0)	2.8	内外) 染付	蛇の目凹高台		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
30	14	4	SX1	磁器	水滴	罐筒形	(3.1)	(2.4)	(1.7)	外) 染付、陰刻	穿孔1か所		透明釉		織密	織密	白	黒色粒	良好	肥前系	
53	18	5	S51 (南壁25層)	陶器	灯明受皿	罐筒形			(9.8)		外) 環状痕		鉄釉	暗褐 (10YR3/4)	密	密	灰褐 (7.5YR6/2)		良好	瀬戸美濃系	19世紀
56	18	5	近代焼乱	陶器	灯明受皿	罐筒形		(4.0)	1.9		外) 環状痕		鉄釉	褐灰 (5YR6/1)	密	密	にふい赤褐 (5YR4/3)		良好	瀬戸美濃系	19世紀

第3表 遺物観察表(土製品)

*法量()は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	出土地点	種類	法量(cm)			成形技法	特徴・備考
					A	B	C		
31	14	4	SX1	目皿	(8.5)	(9.5)	2.1		

第4表 遺物観察表(木製品)

*法量()は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	出土地点	分類1	分類2	法量(cm)			特徴・備考
						A	B	C	
33	14	5	SX1	箸		17.3	1.2	0.4	
34	14	5	SX1	箸		17.8	1.8	0.5	
35	15	5	SX1	下駄	歯	5.1	12.3	1.1	差歯下駄の歯
36	15	5	SX1	札		20.7	4.7	0.9	墨書あり。表「丸輪に泉、■●■」、裏「カネに久、三十二番」
37	15	5	SX1	箱	蓋?	27.3	11.5	1.0	墨書(?)あり
38	15	5	SX1	箱	側板	<27.3>	<7.1>	<0.7>	釘穴6か所、両端に組み合わせ部
39	15	5	SX1	箱	側板	<22.7>	<5.7>	<4.5>	釘穴6か所
40	15	5	SX1	曲物	底板	8.7	8.4	0.9	
41	16	5	SX1	樽	栓	4.3	2.1	2.1	面取り加工
42	16	5	SX1	樽	側板	<24.0>	<7.5>	<1.4>	栓穴(?)あり
43	16	5	SX1	桶	側板	<29.9>	<13.6>	<1.6>	一部L字に切除。転用か
44	16	5	SX1	桶	側板	<18.0>	<4.1>	<1.1>	
45	16	5	SX1	桶	底板	17.2	6.6	1.1	釘穴2か所、竹釘の打ち損じあり。裏面煤付着
46	16	5	SX1	桶	底板	<17.3>	<3.0>	<1.0>	釘穴2か所
47	16	5	SX1	脚		18.5	4.9	2.5	ホゾ有。机脚か
48	17	5	SX1	建物部材		<15.9>	<5.8>	<4.3>	ホゾ・ホゾ穴、受け溝あり。一部で炭化著しい
49	17	5	SX1	建物部材		28.7	3.4	1.7	釘穴3か所、ホゾ穴1か所、受け溝1か所
50	17	5	SX1	部材		9.8	3.3	3.0	中央部を90°角で切除。別部材の受け部か
51	17	5	SX1	部材		<32.3>	<10.8>	<4.7>	削り痕あり
54	18	5	SS1	杭		<51.5>	<10.5>	<2.7>	桶側板の転用
55	18	5	SS1	杭		<32.1>	<5.7>	<3.2>	一部L字に切除。転用か

第5表 遺物観察表(石製品)

*法量()は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	出土地点	種類	法量(cm)			特徴・備考
					A	B	C	
6	12	4	Pit2	石板	<13.1>	<7.6>	<0.5>	
32	14	4	SX1	砥石	<12.7>	<4.3>	1.1	硯転用か

第6表 遺物観察表(金属製品)

*法量()は復元実測値、〈 〉は残存値である。

報告番号	挿図	写真図版	出土地点	分類1	分類2	法量(cm)				重量(g)	特徴・備考
						A	B	C	d		
52	17	5	SX1	環状金具		3.5	3.2	0.2		0.71	径3.1~3.6cmの楕円リング(交差部で絞られていた可能性あり)
57	18	5	近代撈乱	鈎状金具		2.8	1.2	0.1		1.31	鈎り針状に屈曲する。先端に穴(径3mm)あり

第5章 自然科学分析

第1節 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）から出土した大型植物遺体

バンドリ スタルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

山梨県甲府市に所在する甲府城下町遺跡は、江戸時代から近代における遺跡である。ここでは、中央4丁目地点の調査で採取された堆積物から得られた大型植物遺体の同定結果を報告し、当時の利用植物や植生、栽培状況について検討した。なお、同じ堆積物試料を用いて昆虫同定と動物遺体同定も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、江戸時代後期～末期とされる遺構 SX1 の3層と4層から、昭和測量株式会社により採取された堆積物2試料である。

堆積物は、パレオ・ラボにて500ccを最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。大型植物遺体の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。計数が困難な分類群については、おおよその数を記号(+)で示した。試料は、甲府市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のマツ属複維管束亜属葉とツガ葉、イヌガヤ種子の3分類群、広葉樹のブドウ属種子とエノキ属核、クワ属核、クリ果実、カキノキ種子、エゴノキ核、モチノキ属核の7分類群、草本植物ではコナギ種子とスゲ属果実、ヒメクグ果実、カヤツリグサ属果実、ホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、オヒシバ属種子（穎果）、ヒエ属有ふ果・炭化有ふ果、イネ籾殻・炭化籾殻・炭化種子（穎果）、オオムギ炭化種子（穎果）、キケマン属種子、タガラシ果実、マメ科A種子、カラムシ属果実、トウガン種子、スイカ種子、メロン仲間種子、カタバミ属種子、トウダイグサ種子、ソバ果実、ヤナギタデ果実、サナエタデーオオイヌタデ果実、イヌタデ果実、ミチヤナギ属果実、ギシギシ属果実、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、スベリヒユ属種子、ナス種子、ナス属種子、ゴマ種子、エゴマ果実の33分類群、計43分類群が得られた。この他に、科以上の詳細な同定ができない芽の一群を不明芽、同定の識別点を欠く種実の一群を同定不能炭化種実とした。また、大型植物遺体以外には、不明動物遺体も得られたが、同定の対象外とした（表1）。

以下に、大型植物遺体の産出状況を層位別に記載する。

3層：イネが多く、ヒエ属がやや多く、ツガとナス属が少量、イヌガヤとブドウ属、エノキ属、クワ属、クリ、エゴノキ、モチノキ属、コナギ、ヒメクグ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、メヒシバ属、オオムギ、キケマン属、タガラシ、マメ科A、カラムシ属、トウガン、スイカ、メロン仲間、トウダイグサ、ソバ、サナエタデーオオイヌタデ、イヌタデ、ミチヤナギ属、ギシギシ属、ノミノフスマ、ウシハコベ、アカザ属、スベリヒユ属、ナス、ゴマがわずかに得られた。

4層：イネが多く、ヒエ属とスベリヒユ属が少量、マツ属複維管束亜属とツガ、イヌガヤ、カキノキ、コナギ、スゲ属、カヤツリグサ属、ホタルイ属、メヒシバ属、オヒシバ属、カラムシ属、カタバミ属、ヤナギタデ、ノミノフスマ、ウシハコベ、アカザ属、ナス属、ゴマ、エゴマがわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) ツガ *Tsuga sieboldii* Carrière 葉 マツ科

暗褐色で、扁平な針形。背面の中央部には縦方向の溝があり、腹面には幅の広い二列の気孔条がある。先端は二裂して鈍い。基部にあるねじれた葉柄がツガの特徴である。長さ 7.8mm、幅 1.7mm。

(2) エノキ属 *Celtis* sp. 核 アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観はいびつな円形で稜がある。頂部にはやや突出した嘴状の肥厚がある。表面は平滑で、着点はややくぼむ。長さ 3.6mm、幅 3.0mm、厚さ 3.0mm。

(3) クワ属 *Morus* spp. 核 クワ科

赤褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形。断面は卵形または三角形で、背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ 2.3mm、幅 1.6mm。

(4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実 ブナ科

暗褐色で、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高 14.2mm、残存幅 6.3mm。

(5) カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科

暗褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がって突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。残存高 3.7mm、残存幅 3.7mm。

(6) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果・炭化有ふ果 イネ科

有ふ果は赤褐色で、側面観は紡錘形、縦方向に細かい筋がある。内穎は膨らまず、外穎は中央部が最も膨らむ。長さ 2.8mm、幅 1.6mm。炭化有ふ果は、残存長 1.7mm、残存幅 1.5mm。那須 (2017) に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のタイヌビエの長幅比に近い。

(7) イネ *Oryza sativa* L. 籾殻・炭化籾殻・炭化種子 (穎果) イネ科

籾殻は赤褐色で、完形ならば上面観が楕円形、側面観が長楕円形。2 条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。長さ 7.3mm、残存幅 1.6mm。炭化籾殻は、残存長 4.1mm、残存幅 1.2mm。炭化種子 (穎果) の上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形で、一端に胚が残る。両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 4.6mm、幅 2.9mm。

(8) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 (穎果) イネ科

一部発泡している。側面観は長楕円形で、最も幅の広い部分が中央付近にある。腹面中央部には縦に走る 1 本の溝がある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。断面は楕円形である。長さ 4.2mm、幅 2.7mm、厚さ 1.8mm。

(9) マメ科 A *Fabaceae* sp. A 種子 マメ科

変形しているが、完形ならば上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形か。臍は残存していないが痕跡が明確に確認でき、全長の半分から 2/3 ほどの長さである。この特徴からアズキ亜属に似ている。残存長 3.5mm、残存幅 2.1mm。

(10) トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科

赤褐色で、完形ならば倒卵形、表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。全周の縁には薄い段差がある。残存長 5.3mm、残存幅 4.7mm。

(11) スイカ *Citrullus lanatus* (Thunb.) Matsum. et Nakai 種子 ウリ科

赤褐色で、側面観は倒卵形、表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚がわずかに見られる。残存長 11.2mm、残存幅 6.2mm。

(12) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。長さ 6.9mm、幅 3.0mm。

(13) ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科

暗赤茶色で、完形ならば上面観は三角形、側面観は頂部の尖った卵形。稜となる辺縁部はやや薄い。残存長 6.4mm、残存幅 4.2mm。

(14) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

赤褐色で、完形ならば上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。残存長 2.3mm、残存幅 2.3mm。

(15) ナス属 *Solanum* spp. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。ナス以外のナス属である。長さ 1.4mm、幅 1.7mm。

(16) ゴマ *Sesamum orientale* L. 種子 ゴマ科

明褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面は平滑で、縁に沿って浅い溝がある。長さ 3.1mm、幅 1.9mm。

(17) エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点があり、やや突出する。表面には不規則で多角形の浅い網目状隆線がある。長さ 2.4mm、残存幅 2.2mm。

4. 考察

甲府城下町遺跡中央 4 丁目地点の江戸時代後期～末期（近代初頭）とされる遺構 SX1 の 3 層と 4 層から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物で果樹のカキノキ、水田作物のイネ、畑作物のオオムギ、トウガン、スイカ、メロン仲間、ソバ、ナス、ゴマ、エゴマ、食用可能な野生植物のブドウ属とエノキ属、クワ属、クリ、マメ科 A、カタバミ属、アカザ属、ナス属が得られた。クリの子葉は食用となる部位であるが、果実は食用ではないため、殻を剥いた後に不要な果実が捨てられた可能性がある。また、多量のイネの籾殻・炭化籾殻が含まれており、籾摺り後の籾殻が廃棄され燃やされた可能性がある。同じ堆積物を用いた昆虫分析の結果によると、SX1 は食品残渣などの生活ゴミを廃棄したゴミ捨て場として機能していたと推定されている（昆虫分析の項参照）。大型植物遺体の分析結果も、食用として利用された植物が廃棄された状況を示している可能性がある。

これら以外の草本植物では、抽水植物のコナギとタガラシ、湿生～抽水植物のタガラシとスゲ属、ヒメクグ、カヤツリグサ属、ホタルイ属、ヒエ属などが産出した。また、やや湿った場所に生育するギンギシ属とノミノフスマ、乾いた場所を好むメシバ属とオヒシバ属、キケマン属、マメ科 A、カタバミ属、トウダイグサ、サナエタデーオオイヌタデ、イヌタデ、ミチヤナギ属、ウシハコベ、アカザ属、スベリヒユ属、ナス属なども産出しており、これらの草本類が遺構周辺に生育していたと考えられる。また、樹木ではマツ属複雑管束亜属とツガ、イヌガヤ、エノキ属、クワ属、エゴノキ、モチノキ属が周辺に生育していたと考えられる。

引用文献

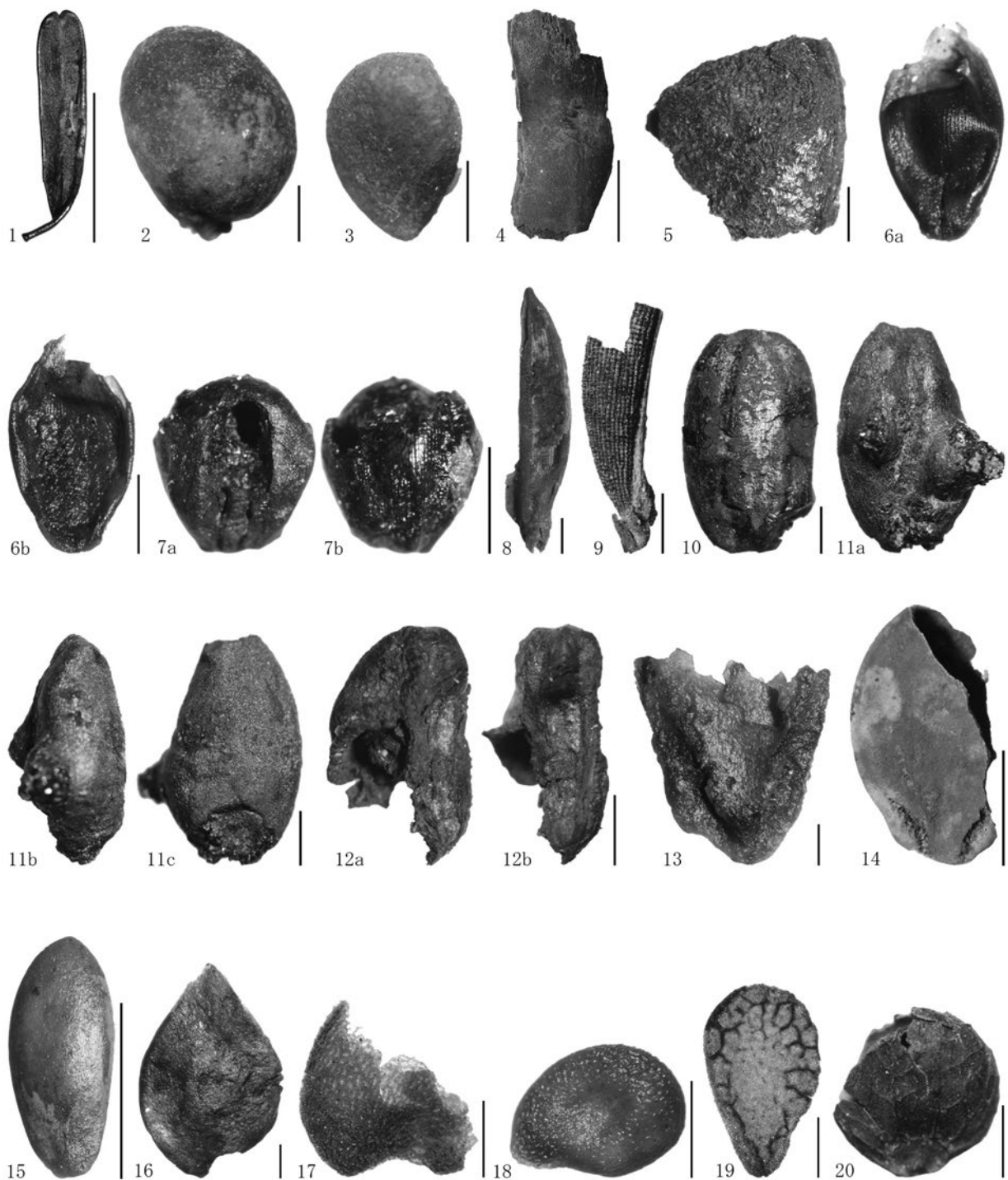
那須浩郎（2017）縄文時代にヒエは栽培化されたのか？ SEEDS CONTACT, 4, 27-29.

米倉浩司・梶田 忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

表1 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	試料No. 出土地点 層位 時期	SX1	
		ツル土1	ツル土2
		3層	4層
		江戸時代後期～末期 (近代初頭)	
水洗量 (cc)	500		
マツ属複維管束亜属	葉		1 (+)
ツガ	葉	20 (5)	6
イヌガヤ	種子	(2)	(2)
ブドウ属	種子	(1)	
エノキ属	核	1	
クワ属	核	1 (1)	
クリ	果実	(3)	
カキノキ	種子		(2)
エゴノキ	核	(1)	
モチノキ属	核	2	
コナギ	種子	1	1
スゲ属	果実		1
ヒメクグ	果実	1	
カヤツリグサ属	果実	5	3
ホタルイ属	果実	2	6
メヒシバ属	有ふ果	2	4
オヒシバ属	種子 (穎果)		2
ヒエ属	有ふ果	11 (52)	1 (31)
	炭化有ふ果	1	
イネ	籾殻	109 (++++)	132 (++++)
	炭化籾殻	90 (++)	92 (++++)
	炭化種子 (穎果)	3 (2)	7 (2)
	炭化種子 (穎果)	3 (1)	
オオムギ	種子	1	
キケマン属	果実	1 (1)	
タガラシ	種子	1	
マメ科A	果実	1	1
カラムシ属	種子	1 (1)	
トウガン	種子	1	
スイカ	種子	3 (1)	
メロン仲間	種子		1
カタバミ属	種子	(3)	
トウダイグサ	果実	(3)	
ソバ	果実		1
ヤナギタデ	果実	1	
サナエタデーオオイヌタデ	果実	(2)	
イヌタデ	果実	1	
ミチヤナギ属	果実	1	
ギンギシ属	果実	1	
ノミノフスマ	種子	3	1
ウシハコベ	種子	2	4 (1)
アカザ属	種子	1	2
スベリヒユ属	種子	7 (2)	14
ナス	種子	(3)	
ナス属	種子	12	3
ゴマ	種子	(1)	(2)
エゴマ	果実		1
不明	芽	(+)	(+)
同定不能	炭化種実	(3)	
不明	動物遺体	(+)	

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上



スケール 1, 4, 14, 15:5mm, 2, 3, 5-13, 16-20:1mm

図版1 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）SX1から出土した大型植物遺体

1. ツガ葉（3層）、2. エノキ属核（3層）、3. クワ属核（3層）、4. クリ果実（3層）、5. カキノキ種子（4層）、6. ヒエ属有ふ果（3層）、7. ヒエ属炭化有ふ果（3層）、8. イネ籾殻（4層）、9. イネ炭化籾殻（4層）、10. イネ炭化種子（穎果）（3層）、11. オオムギ炭化種子（穎果）（3層）、12. マメ科A種子（3層）、13. トウガン種子（3層）、14. スイカ種子（3層）、15. メロン仲間種子（3層）、16. ソバ果実（3層）、17. ナス種子（3層）、18. ナス種子（3層）、19. ゴマ種子（3層）、20. エゴマ果実（4層）

第2節 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）から出土した昆虫化石

森 勇一（東海シニア自然大学）・株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

山梨県甲府市に所在する甲府城下町遺跡は、江戸時代における城下の賑わいを昆虫組成を通じて知ることができるわが国为数の遺跡である。これまでの分析を通じてヒトの集中居住や遺構の役割、穀物貯蔵の実態など多くの情報が得られてきた（森・山本，2020；森・株式会社パレオ・ラボ，2021）。

本論では中央4丁目地点の発掘調査で採取された遺構内堆積物から得られた昆虫化石を同定し、当時の古環境について検討した。なお、同じ堆積物を用いて大型植物遺体分析と動物遺体同定も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

昆虫試料は、SX1の3層（試料1）と4層（試料2）から採取された計2試料である（表1、2）。時期は、江戸時代後期～末期とされている。

堆積物試料の水洗はパレオ・ラボにて行なわれ、各分析試料についてそれぞれ500ccを、最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。昆虫の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示した数ではない。

3. 分析結果

試料1から計67点、試料2から31点の計98点の昆虫化石が確認された（表2）。産出した昆虫化石のうち、主なものについては、図版1、2に実体顕微鏡写真を掲げた。

分類群ごとにみると、科レベルまで同定したもの4科11点、属レベルは2属40点、種まで同定できたものは9種44点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が3点存在する。検出部位別では、ハエ目の囲蛹（puparium）が最も多く、つづいて上翅（Elytron）、前胸背板（Pronotum）、腹部（Abdomen）などであった。

生態別では、地表性で汚物食ないし雑食性のハエ目が計63点（64.3%）、うち発酵物食のショウジョウバエ類が計39点（39.8%）であった。一方で、ヒトが居住域周辺に貯蔵した食品類を加害する貯穀性昆虫が計17点（17.3%）含有される点の特筆される。

特徴的な種についてみると、最も多く発見された昆虫は、長さ2.0～2.5mm（完形）のサナギ（囲蛹）よりなるショウジョウバエ属 *Drosophila* sp.（24点）であった。これに次いで、やや大型でショウジョウバエ属2 *Drosophila* sp.-2 に分類したサナギ（完形の長さ3.0～3.8mm）が計15点と多産した。両者とも発酵果実や発酵食品に固有の小型のハエの仲間である。このほか、動物の死体や動物質の腐敗物にたかるキンバエ *Lucilia caesar* のサナギが試料1より計13点確認されている。前気門のキチン環に収れんする3条の裂溝を有する特徴（鈴木・緒方，1968）により同定される。他のハエ類では、人家周辺に生息し、食物残渣等にたかるイエバエ *Musca domestica* が試料1を中心に計11点出現している。

これ以外には、コメをはじめ貯蔵された穀類を加害するコクゾウムシ *Sitophilus zeamais* が試料1より5点確認され、同じく貯蔵穀物に集まる貯穀害虫として著名なノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* が試料2を中心に計6点産出した。本種は、属名にイネの名を冠するほど穀類に特化した生態を有し、健全な穀粒を加害することはないが、他の昆虫が発生して生じた破碎穀物や穀粉を好んで食する（吉田，1989）。ノコギリヒラタムシは、穀物貯蔵庫に発生する（日本家屋害虫学会編，1995）。同様の生態を有する貯穀性

昆虫では、コクヌストモドキ *Tribolium castaneum* が試料 2 より 1 点確認された。

必ずしも出現点数は多くないが、鰹節や乾魚、羽毛製品、皮革などを食する（日本家屋害虫学会編，1995）ヒメマルカツオブシムシ *Anthrenus verbasci*（1 点）や、「粉出し虫」の名で知られ木材食害昆虫として多くの文献（松崎・武衛，1993；日本家屋害虫学会編，1995）に登場するヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* が試料 1 と試料 2 より計 3 点発見されている。

このほか、ウスイロキシムシ *Cryptophagus dilutus* が 1 点確認された点は重要である。ウスイロキシムシは、新築や改築した家の湿った壁に発生するカビ類の孢子や菌糸を食べる、体長 2.2～2.4mm の黄褐色の小型甲虫で、貯穀や乾燥食品の害虫としても知られる（森本，1982）。屋外では、ワラの中や干し草の間などで発見される場合が多く、倉庫や納屋の中でも採集される（森本，1982）。本種は、甲府城下町遺跡の中央 4 丁目 I 工区の調査でも産出しており（森・山本，2020）、乾物や動物質食品に特有の家屋害虫といえる。

4. 考察

甲府城下町遺跡（中央 4 丁目地点）から得られた昆虫分析の結果は、同遺跡中央 4 丁目 I 工区の分析結果（森・山本，2020）とも相互に関連している。今回の分析試料の時期は江戸時代後期～末期とされており、江戸時代後期の中央 4 丁目 I 工区の昆虫組成と比較しうる試料である。産出点数が十分でないため、本報告では古環境復元とヒトの営みの一端を示したに過ぎないが、得られた昆虫組成の持つ意味を最大限に活かし、甲府城下町遺跡（中央 4 丁目地点）におけるムシが語る人々の暮らしについて述べる。

まず第一に、発酵物食のショウジョウバエ類のサナギの多さが重要である。これは、SX1 がゴミ捨て場のような施設であった可能性を示す産出状況として注目に値する。SX1（3 層）から得られた試料 1 では、ショウジョウバエ類に加え、塵芥や動物質の食品残渣に集まるイエバエやキンバエが多産しており、SX1 内に生活ゴミが継続的に廃棄されていた可能性が考えられる。

一方、今回の分析試料では、中央 4 丁目 I 工区において顕著に多産した、人糞に依存して生活するオオクロバエやセンチクバエなどのハエ類がまったく検出されなかった。したがって、SX1 の周辺には便槽やこれに代わる施設が存在しなかったか、あったとしても SX1 から大きく離れていたと考えられる。

ハエ類と並んで重要な指標昆虫では、複数の貯穀性昆虫と家屋害虫の存在が挙げられる。コクゾウムシはコメやムギをはじめ貯蔵された穀類に特有であり、SX1 周辺に穀物貯蔵施設が存在したのは確実である。SX1（4 層）から産出したノコギリヒラタムシやコクヌストモドキもまた、わが国のみならず世界的に有名な貯穀害虫であり、両種の出現からも SX1 付近における貯蔵施設の存在が裏付けられる。

乾魚や羽毛製品などを食する食品害虫のヒメマルカツオブシムシが SX1（4 層）から確認され、同じ試料から乾物など貯蔵された食品類を加害するウスイロキシムシが確認されており、SX1 周辺が江戸時代後期から末期にかけての一時期に、食品残渣など家庭ゴミの廃棄場所として機能していた様子がうかがえる。これに加えて、木質物を加害するヒラタキクイムシが試料 1 と試料 2 の両試料から確認されており、建築資材など腐朽した木材も SX1 内に投棄されていたと推定される。

その一方で、本試料には、樹木や草本植生に由来する陸生の食植性昆虫が 1 点も含有されていなかった。この結果は、当時の甲府城下町遺跡（中央 4 丁目地点）に植生がほとんど繁茂していなかった状況を示すと理解されるが、正しくは今後の試料追加を待ったうえで判断したい。

5. まとめ

甲府城下町遺跡（中央 4 丁目地点）からは、発酵食品に由来するショウジョウバエ類のサナギが多数確認された。これに生活ゴミや食品残渣に集まるイエバエやキンバエが伴っていた。この結果は、SX1 に腐敗した塵芥類が廃棄されていた状況を示している。また、穀類に依存するコクゾウムシやノコギリヒラタムシの産出は、SX1 の周辺に穀物貯蔵施設が存在した可能性を示している。

引用文献

松崎沙和子・武衛和雄（1993）都市害虫百科. 236p, 朝倉書店.

森 勇一・山本 華（2020）甲府城下町遺跡（中央4丁目I工区）から出土した昆虫化石. 昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡XX」：473-488, 甲府市教育委員会.

森 勇一・株式会社パレオ・ラボ（2021）甲府城下町遺跡（中央5丁目1区）から得られた昆虫組成について. 昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡26（中央5丁目1区）」：172-182, 甲府市教育委員会.

森本 桂（1982）家屋の中で発見されるキスイムシの1種について. 家屋害虫, 11・12, 60-61.

日本家屋害虫学会編（1995）家屋害虫事典. 468p, 井上書院.

鈴木 猛・緒方一喜（1968）日本の衛生害虫 - その生態と防除 -. 245p, 新思想社.

吉田敏治（1989）貯穀害虫の生態と貯穀害虫による被害. 吉田敏治・渡辺 直・尊田望之編「図説貯蔵食品の害虫」：129, 全国農村教育協会.

表1-1 甲府城下町遺跡(中央4丁目地点)昆虫リスト(No.1)

試料1

	和名	学名	部位	長さ (幅) mm	写真	食性	生態	調査年度 /サンプル	層位	遺構名	時期
1	コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	左上翅	1.1	1, 2	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
2	コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	右上翅	1.4	3	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
3	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	右上翅	1.5	4	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
4	ヒラタキクイムシ	<i>Lyctus brunneus</i> Stephens	右上翅	1.3	5, 7	食糞性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
5	ヒラタキクイムシ	<i>Lyctus brunneus</i> Stephens	左上翅	1.3	6, 8, 9	食糞性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
6	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.2	10, 11	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
7	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.3	12	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
8	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹	2.4	13, 14	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
9	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.5	15	雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
10	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.8	16	雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
11	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	後方気門	0.2	17-19	雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
12	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.6	20-21	雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
13	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.2	22	雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
14	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	3.2	23	雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
15	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	3.8	24	雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
16	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.0	25-26	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
17	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	3.2	27-29	雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
18	コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	前胸甲板	1.0	30	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
19	コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	前胸甲板	0.8		貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
20	コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	前胸甲板片	0.4		貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
21	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.1		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
22	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
23	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
24	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	0.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
25	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
26	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
27	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.2		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
28	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
29	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.1		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
30	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.3		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
31	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.4	32	雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
32	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.2		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
33	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.2		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
34	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	1.8		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
35	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.5		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
36	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.4		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
37	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	1.6		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
38	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	1.8		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
39	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.2		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
40	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	1.5		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
41	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.3		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
42	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.4		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
43	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	頭部	0.8	33	雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
44	ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.	右上翅片	2.4	34	雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
45	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	腹部背板片	1.2		食屍性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
46	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	腹部	1.0		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
47	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	腹部背板	2.1		食屍性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
48	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	腹部背板	1.6		食屍性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
49	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	腹部腹板	1.8		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
50	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	1.6		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
51	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	2.5		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
52	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片	3.1		雑食性	屋外性など	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
53	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
54	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.1		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
55	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.3		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
56	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
57	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
58	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.2	36-37	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
59	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹	3.6	38-39	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
60	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.8	40	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
61	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
62	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
63	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
64	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	8.2		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
65	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	2.6		不明	不明	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
66	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	2.3		不明	不明	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期
67	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	2.8		不明	不明	2021, 5, 31採取	3層	SX1	江戸後期~末期

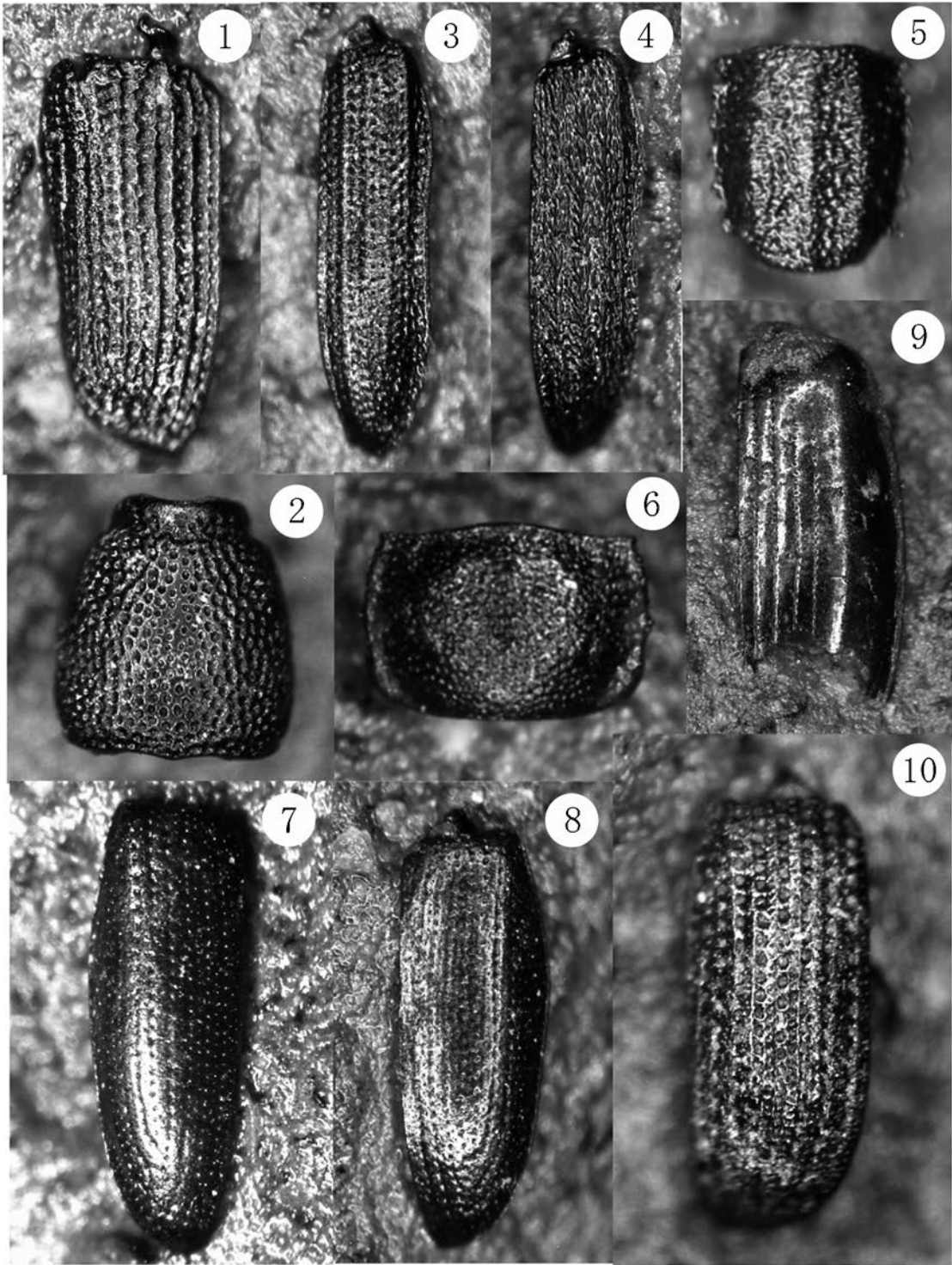
表1-2 甲府城下町遺跡(中央4丁目地点)昆虫リスト(No.2)

試料2

	和名	学名	部位	長さ (幅) mm	写真	食性	生態	調査年度 / サンプル	層位	遺構名	時期
1	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	前胸背板	0.5	41-42	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
2	ヒラタキクイムシ	<i>Lycus brunneus</i> Stephens	腹部	0.8	43	食種性	好種性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
3	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	右上翅	1.2	44	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
4	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	右上翅	1.4	45	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
5	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	右上翅	1.8	46	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
6	ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	右上翅	0.9		貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
7	コクヌストモドキ	<i>Tribolium castaneum</i> Herbst	左上翅	1.7	47, 52	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
8	トビイロシワアリ	<i>Tetramorium tsushimae</i> (Emery)	頭部	0.6	48	雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
9	ウスイロクスイムシ	<i>Cryptophagus dilutus</i> Reitter	前胸背板	0.8	49-51	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
10	トビイロシワアリ	<i>Tetramorium tsushimae</i> (Emery)	頭部	0.6	52-53	雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
11	トビイロシワアリ	<i>Tetramorium tsushimae</i> (Emery)	頭部	0.5		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
12	ヒメマルカツオブシムシ	<i>Anthrenus verbasci</i> (Linne)	右上翅	1.3	54	貯穀性	家屋害虫	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
13	ゾウムシ科	Curculionidae gen. et sp. indet.	右上翅	2.0	55	食種性	好種性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
14	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	腹部	0.6		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
15	アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	腹部	0.5		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
16	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.2		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
17	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.1		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
18	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
19	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
20	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	2.2		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
21	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
22	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	2.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
23	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	1.8		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
24	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	2.3		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
25	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	1.6		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
26	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	1.5		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
27	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹	3.1	56-58	発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
28	ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp.-2	囲蛹片	3.0		発酵物食	屋内性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
29	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.9		雑食性	屋内性など	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
30	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	大顎	2.2		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期
31	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	大顎	1.8		雑食性	地表性	2021, 5, 31採取	4層	SX1	江戸後期～末期

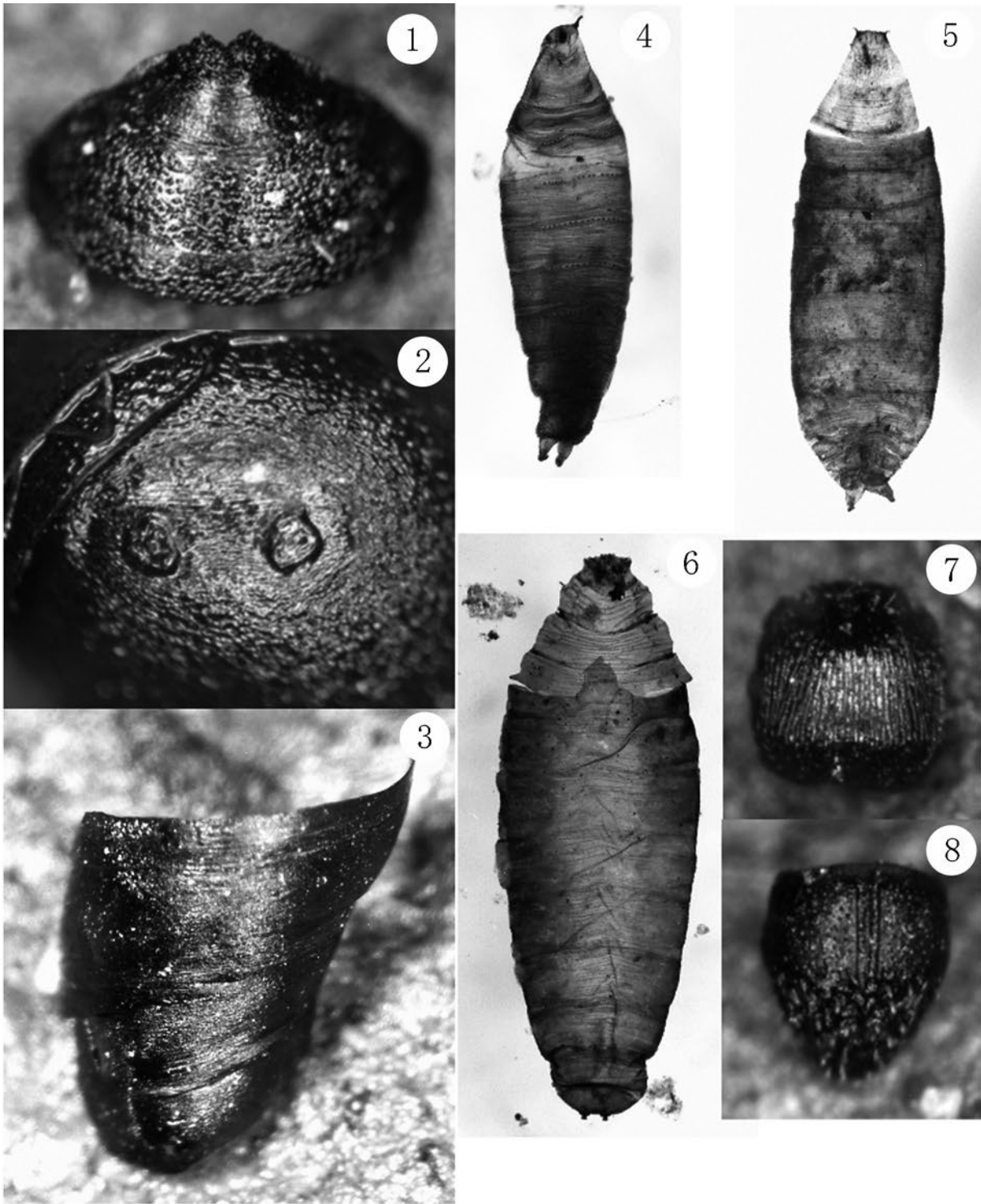
表2 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）における昆虫分析結果

				試料 1	試料 2	合 計
		和 名	学 名			
地表性	肉食・雑食性	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	1	2	3
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.	1		1
		ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	3		3
陸生	食植性	ゾウムシ科	Curculionidae gen. et sp. indet.		1	1
		コクゾウムシ	<i>Sitophilus zeamais</i> Motschulsky	5		5
		コクヌストモドキ	<i>Tribolium castaneum</i> Herbst		1	1
		ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linne)	1	5	6
		ヒメマルカツオブシムシ	<i>Anthrenus verbasci</i> (Linne)		1	1
		ヒラタキクイムシ	<i>Lyctus brunneus</i> Stephens	2	1	3
		ウスイロキスイムシ	<i>Cryptophagus dilutus</i> Reitter		1	1
その他		イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	10	1	11
		キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	13		13
		ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	18	6	24
		ショウジョウバエ属2	<i>Drosophila</i> sp. -2	8	7	15
		アリ科	Formicidae gen. et sp. indet.	2	2	4
		トビイロシワアリ	<i>Tetramorium tsushimae</i> (Emery)		3	3
		不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	3		3
計				67	31	98



図版1 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）から得られた昆虫化石（1）

1. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 左上翅 長さ1.1mm（試料1, 標本1）
2. コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky 前胸背板 長さ1.0mm（試料1, 標本18）
3. ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* (Linne) 右上翅 長さ1.8mm（試料2, 標本5）
4. ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* (Linne) 右上翅 長さ1.4mm（試料2, 標本4）
5. ノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus surinamensis* (Linne) 前胸背板 長さ0.5mm（試料2, 標本1）
6. ウスイロキシムシ *Cryptophagus dilutus* Reitter 前胸背板 幅0.8mm（試料2, 標本9）
7. ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* Stephens 左上翅 長さ1.3mm（試料1, 標本5）
8. ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* Stephens 右上翅 長さ1.3mm（試料1, 標本4）
9. ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. 右上翅片 長さ2.4mm（試料1, 標本44）
10. ゾウムシ科 Curculionidae gen. et sp. indet. 右上翅 長さ2.0mm（試料2, 標本13）



図版2 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）から得られた昆虫化石（2）

1. イエバエ *Musca domestica* Linnaeus 囲蛹片 幅2.2mm (試料1, 標本13)
2. イエバエ *Musca domestica* Linnaeus 後方気門 気門の幅0.2mm (試料1, 標本11)
3. キンバエ *Lucilia caesar* (Linnaeus) 囲蛹片 長さ2.5mm (試料1, 標本9)
4. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp.-2 囲蛹 長さ3.1mm (試料2, 標本27)
5. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp. 囲蛹 長さ2.4mm (試料1, 標本8)
6. ショウジョウバエ属 *Drosophila* sp.-2. 囲蛹 長さ3.6mm (試料1, 標本59)
7. トビイロシワアリ *Tetramorium tsushimae* (Emery). 頭部 長さ0.6mm (試料2, 標本8)
8. ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* Stephens 腹部 長さ0.8mm (試料2, 標本2)

第3節 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）出土の動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）の発掘調査において、遺構から動物遺体が出土した。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。なお、同じ堆積物を用いて大型植物遺体分析と昆虫同定も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

試料は、SX1（大型土坑状遺構）から出土した魚骨3点である。内訳は、現地取り上げ試料が1点と、堆積物から回収された試料が2点である。堆積物は、パレオ・ラボにて500ccを最小0.5mmの篩を用いて水洗し、試料を抽出した。遺構の時期は、江戸時代後期～末期と推定されている。試料を肉眼で観察し、標本との比較により部位と分類群を同定した。

3. 結果

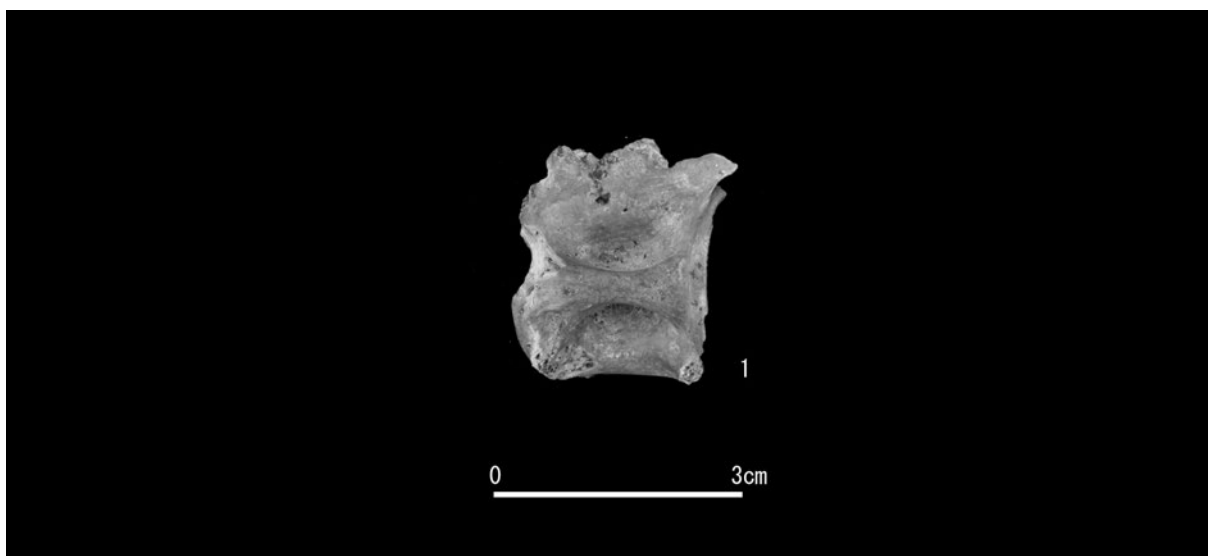
同定結果を表1に示す。同定されたのは、マグロ属（*Thunnus* sp.）であり、この他、硬骨魚綱の椎骨破片と部位不明破片が確認された。

マグロ属は椎骨1点が同定された。神経棘や椎体の一部を欠損する。

硬骨魚綱の椎骨破片は、半分以上が欠損しており、種の同定には至らなかった。試料は灰白色を呈しており、火を受けたと考えられる。

表1 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）出土の動物遺体同定結果

メモ番号	No.	出土地点 (採取地点)	時期	分類群	部位	左右	点数	状態	備考
ツル骨1	1	SX1	江戸時代後期～末期（近代初頭）	マグロ属	椎骨	—	1	椎体一部欠	
ツル土1	2			硬骨魚綱	椎骨	—	1	1/2欠損、焼骨	3層 堆積物水洗試料
ツル土1	3			硬骨魚綱	不明	不明	1		3層 堆積物水洗試料



図版1 甲府城下町遺跡（中央4丁目地点）の動物遺体 1. マグロ属椎骨

第6章 総括

今回の調査では、遺構 SX 1 の埋土より土壌試料を採取し、動植物遺体や昆虫の科学分析を行った。分析の成果を踏まえ、まとめとする。

第1節 廃棄場所として継続利用された敷地内特定エリア（第19・20・21図）

今回の調査は、幅 1.3m、長さ 6.3m（面積約 8㎡）のトレンチ状の小範囲であったことから、検出された遺構の半数が調査区外に延伸していた。第2遺構面で調査区東隅より検出された遺構 SX 1 も、調査区外へ延伸する遺構の一つであり、その規模を把握するに至らなかったが、遺構底部の形状と南壁断面から、円形に近い平面形状をした断面楕円形の大型の土坑と推定している。遺構覆土は下層から木削を含む粗粒砂層（4層）、木削屑と炭化木片を含む細粒砂と粘土の混合層（3層）、炭化物を含む細粒砂と粘土の混合層（2層）、粘土と粗粒砂の混合層（1層）の順に堆積している。遺構年代としては検出状況や 18・19 世紀代の肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器が出土していることに加え、第1遺構面で出土していた型紙摺絵の印判磁器が皆無であることから、18 世紀末から 19 世紀初頭の近世と推定している。

本遺構からの出土遺物数は、今回の調査で出土した総数の 8 割を占め、陶磁器や木製品のほか、数点の大型種子や魚類脊椎骨など多種にわたり、一部の木製品には墨書が認められた。このうち板状木製品の墨書（報告番号 36）からは「丸輪に泉」「カネに久」の屋号や「三十二」の漢数字が判別できる。これについては、文化 3 年（1806）の『甲州道中分間延絵図』等の絵図からは柳町三丁目に問屋場が設けられていたこと、嘉永 7 年（1854）・明治 5 年（1872）の『甲府買物独案内』からは問屋業を営む「丸輪に泉」屋号が確認できる。

現場調査時点では遺構の規模・性格を捉え切れず、便宜的に性格不明遺構とした SX 1 であるが、覆土より採取した土壌試料の科学分析を行った結果、前章第 1・2 節にあるように栽培果樹や畑作物の果実や種子、多量の籾殻や炭化籾殻等とともに、発酵食物のショウジョウバエ類、イエバエやキンバエといった動物質の食物残渣に集まる昆虫の存在が確認された。また、木質物を加害するヒラタキクイムシも確認されており、SX 1 より出土した木製品には、腐朽し虫害を受けたものが見られる。これらのことから、SX 1 は食物残渣等の生活で生じる不要物の廃棄場として用いられたことが考えられる。

さて、SX 1 堆積層断面（第 8 図）において、SX 1 直上に「近・現代の廃棄堆積層」とする層があるが、この層は調査区南壁の基本層序（第 3 図）の 3～5 層に当たる。これらの層は、炭化木材と灰塊が積層するとともに、油分・油臭が極めて顕著であることから、廃棄物等の焼却に伴い生じたものであることは想像に難くない。この近・現代の廃棄堆積層は、SX 1 直上より土坑状に掘り窪め、廃棄物の埋設と焼却処分に用いられていた様子と、生活とともに増えた廃棄物が小山状に盛上っていた様子が観察でき、戦災焼土層（第 3 図 1・2 層）による埋没が小山の裾部分のみであることから、昭和 20 年（1945）の空襲直前まで継続的に廃棄物の処分を行っていたと判断できよう。また、攪乱・客土の直下でわずかに確認された第 3 図 3 層が現代の焼却廃棄物堆積であることから、戦後も敷地内のほぼ同位置で廃棄物の焼却が行われていたことが伺われる。

SX 1 は構築から 100 年以上に渡り、敷地内のほぼ同位置で廃棄物の処分をしていたと言えるが、利用期間に対し、特に近代以降の廃棄物の残存が少ないことは、敷地外への持ち出しを行っていたことを示唆するものである。

地図から土地利用を見ると、大正 9 年（1920）では本調査地点には「丸茂荒物店」が所在し、北側に「書肆徴古堂」が隣接する（第 19 図）。21 年後の昭和 16 年（1941）では、「丸茂荒物店」と「東浦書店（注 1）」に挟まれ「鶴田電気ヤ（注 2）」の名が見えるが、「83」の地番表示や裏手の庭、地割り線から鶴田電気ヤと丸茂荒物店は、土地を共同で利用していることがわかる（第 20 図）。今回 SX 1 が検出されたのは、丸茂荒

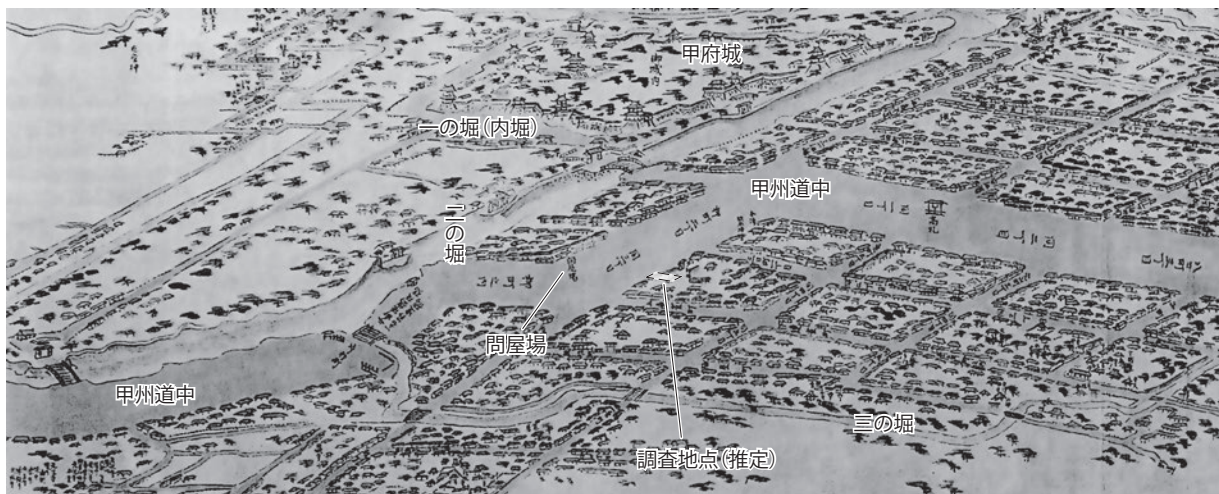
物店裏手に当たる。なお、本調査地には享和3年（1803）の『享和三年 上下府中各町家数間数改帳（一）柳町家持表口間数御改帳』によると「清兵衛」が、明治30年（1897）複製の『和紙図（注3）』によると「鈴木太吉」が、それぞれの時期に居住していたことが明らかとなっているが、荒物屋を営む丸茂氏との関係をつかむには至らなかった。

敷地内の一定の場所が廃棄場所として継続利用されたことは、少なくとも大正9年（1920）以降、同じ家系の人物が土地を所有し、一定のエリアで廃棄物を処分する習慣が持たれていたことに起因すると推定される。

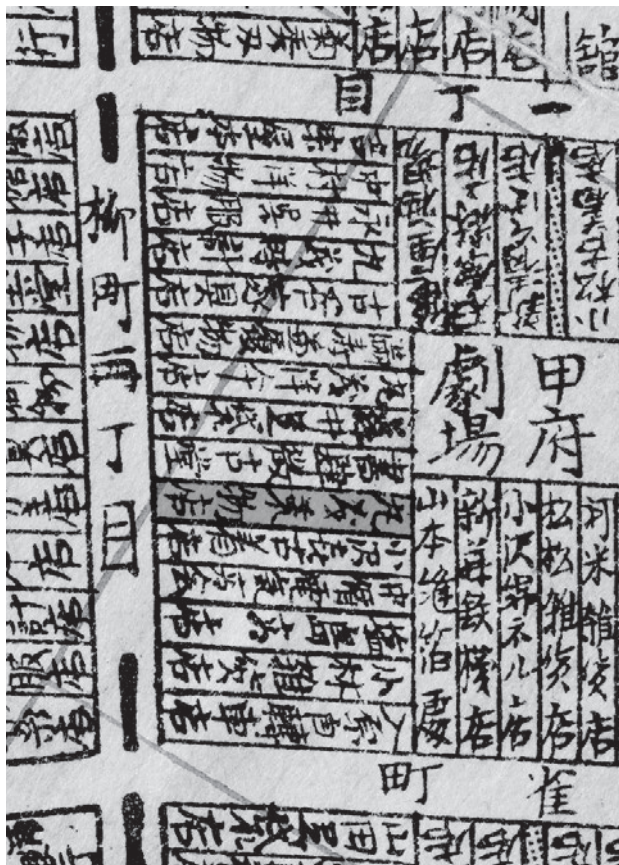
（注1）明治4年創業の書店で、徴古堂の異名。

（注2）今回の発掘調査と同じ事業者。

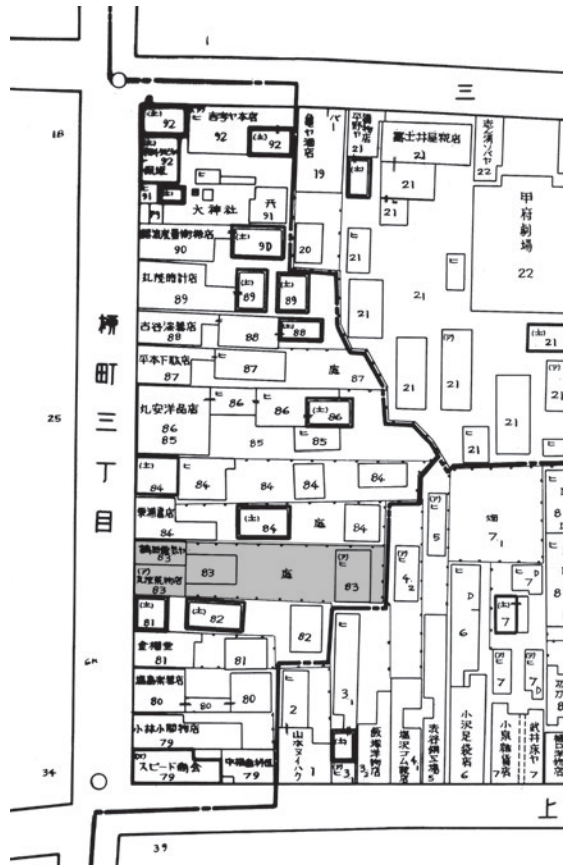
（注3）甲府市立図書館所蔵。注1地点に「藤森忠七」と記載されるため、原図は明治4年以前の作図の可能性もある。



第19図 調査地点の推定位置 『甲州道中分間延絵図』文化3年(1806)に加筆 (所蔵:山梨県立博物館)



第20図 大正9年(1920)頃の土地利用
『甲府市街明細地図』東京交通社(大正9年[1920])に加筆
(所蔵:山梨県立博物館)



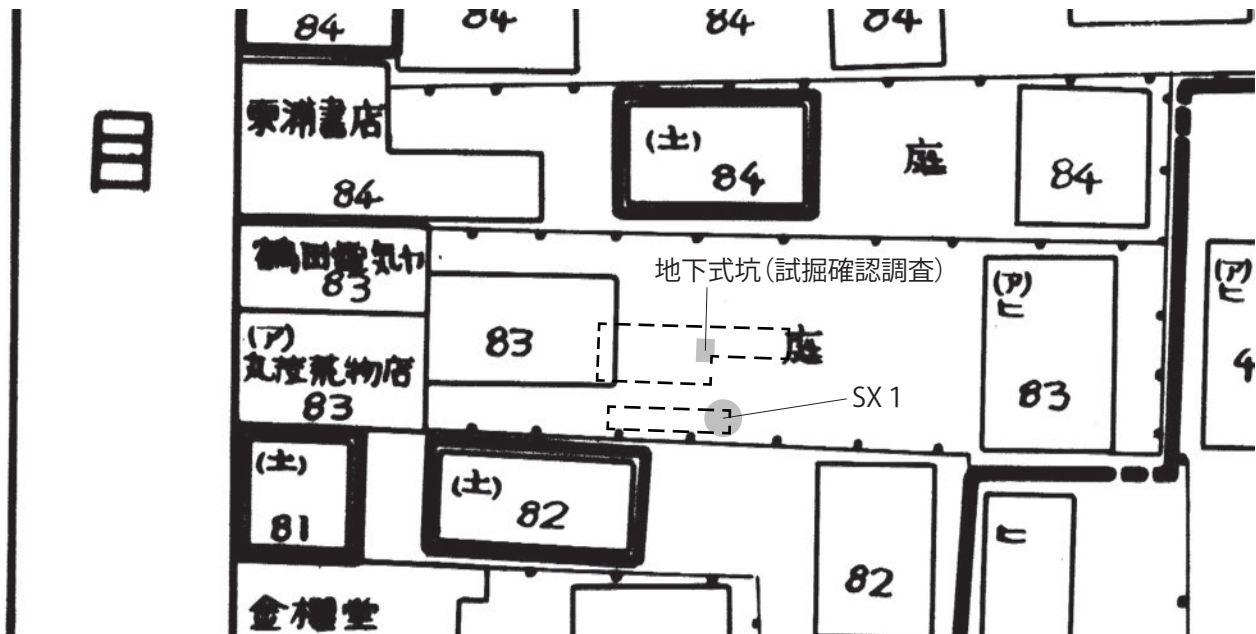
第21図 昭和16年(1941)頃の土地利用
『商都甲府市家屋図』大蔵省銀行局保険係(昭和16年[1941])に加筆
(所蔵:甲府市教育委員会)

第2節 土壌試料の分析からうかがえる貯蔵施設の存在（第1・22図）

科学分析では、前節で挙げた発酵食性・雑食性の昆虫のほか、コクゾウムシ・ノコギリヒラタムシ等の貯蔵食性昆虫や、ヒメマルカツオブシムシ・ウスイロキスイムシ等の食品害虫も少数ながら確認されており、SX 1 周辺に貯蔵施設が存在した可能性が指摘されている。

本調査に先立ち甲府市教育委員会が実施した試掘確認調査（第1図②）で木枠を有する地下式坑が検出されており、この地下式坑が貯蔵施設であった可能性が考えられるが、本調査と試掘確認調査範囲が重複しないことから、本書には試掘確認調査の成果を掲載していない。

科学分析を含め、今後発行される試掘調査報告書『甲府市内遺跡（番号未定）』と合わせて参照されたい。



第22図 SX 1・地下式坑の推定位置 『商都甲府市家屋図』大蔵省銀行局保険係(昭和16年[1941])に加筆 (所蔵:甲府市教育委員会)

引用・参考文献

論文・地誌等

- 磯貝正義 1984 「古代の甲府 - 青沼・表門二郷を中心として -」『甲府市史研究』創刊号 甲府市市史編さん委員会
- 磯貝正義 1989 「武田氏と甲府 - 信虎開府前 -」『甲府市史研究』第5号 甲府市市史編さん委員会
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』
- 古泉 弘 2013 『事典 江戸の暮らしの考古学』吉川弘文館
- 甲府市役所 1918 『甲府略誌』
- 甲府市市史編さん委員会 1992 『甲府市史 通史編 第二巻 近世』
- 甲府市市史編さん委員会 1992 『甲府市史 資料編 第一巻 原始 古代 中世』
- 甲府市市史編さん委員会 1993 『甲府市史 別編Ⅲ 甲府の歴史』
- こうふ開府 500 年記念誌編集委員会 2019 『甲府歴史ものがたり』
- 山梨県立図書館 1973 『甲州文庫史料 第二巻 甲府町方編』

報告書

- 甲府市教育委員会 1980 『朝気遺跡 - 東小学校々庭の土師遺跡 - 発掘調査報告書』
- 甲府市教育委員会 2010 『朝気遺跡』甲府市文化財調査報告 51
- 甲府市教育委員会 1973 『上石田遺跡 - 甲府盆地底部の中期縄文遺跡 - 発掘調査報告書』
- 甲府市教育委員会 2016 『甲府市内遺跡XⅡ』甲府市文化財調査報告 81
- 甲府市教育委員会 2019 『甲府市内遺跡XⅣ』甲府市文化財調査報告 102
- 甲府市教育委員会 2020 『甲府市内遺跡XⅤ』甲府市文化財調査報告 109
- 甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2017 『甲府城跡（清水曲輪地点他）』甲府市文化財調査報告 89
- 甲府市教育委員会・株式会社パスコ 2015 『甲府城下町遺跡XⅡ』甲府市文化財調査報告 72
- 甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2015 『甲府城下町遺跡XⅢ』甲府市文化財調査報告 74
- 甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2020 『甲府城下町遺跡XⅩ』甲府市文化財調査報告 107
- 甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2021 『甲府城下町遺跡26』甲府市文化財調査報告 117
- 甲府市教育委員会・昭和測量株式会社 2019 『塩部遺跡Ⅲ』甲府市文化財調査報告 105
- 甲府市教育委員会 2019 『史跡 武田城下町遺跡Ⅱ（武田氏館跡関係資料集）』甲府市文化財調査報告 5
- 甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2019 『緑が丘二丁目遺跡』甲府市文化財調査報告 104
- 山梨県埋蔵文化財センター 1996 『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第123集
- 山梨県埋蔵文化財センター 2010 『八幡神社遺跡』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第265集
- 山梨県埋蔵文化財センター 2016 『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第308集



着手前の調査地点全景 西より



第1遺構面プラン検出状況 北西より



調査区西壁面の土層堆積状況 東より



Pit 1 半截層断面 南より



Pit 2 半截層断面 南より



Pit 2 完掘 南より



第1遺構面完掘状況 (オルソモザイク写真)

図版 2



Pit 3 半截層断面 南より



Pit 3 完掘 南より



Pit 4 半截層断面 南より



Pit 4 完掘 南より



第2遺構面プラン検出状況 西より



第2遺構面完掘状況 北西より



第2遺構面完掘状況 (オルソモザイク写真)



SK1 完掘 南より



Pit5 完掘 南より



SX1 木材廃棄状況 北より



SX1 層断面 北より



SS1 ベルト層断面 東より



SS1 杭列検出状況1 (破線は壁内石列確認位置) 北西より



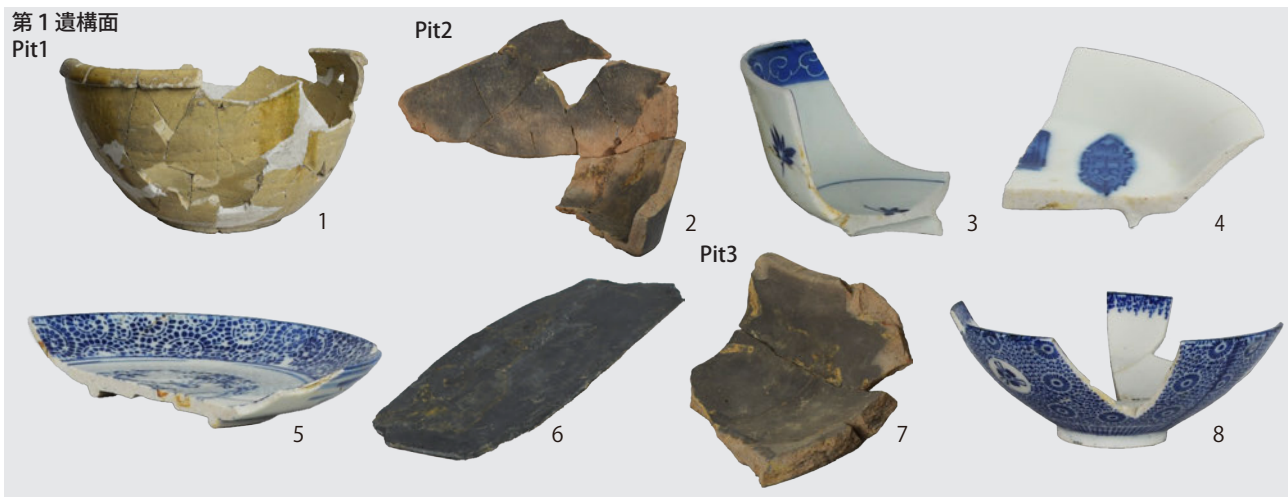
SS1 杭列検出状況2 (破線は壁内石列確認位置) 北より



SS1 南壁内対応石列確認状況 北より

図版 4

第1遺構面
Pit1



第2遺構面
SX1



第2遺構面
SX1



SS1



近代攪乱



報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき28 (やまなしけんこうふしちゅうおうよんちようめ347ちてん)
書名	甲府城下町遺跡28 (山梨県甲府市中央4丁目347地点)
副書名	鶴田電気ビル建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	125
編著者	望月健太・バンドリ スダルシャン・森 勇一・三谷智広
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2022(令和4)年3月15日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こうふじょうかまちいせき	やまなしけんこうふしちゅうおうよんちようめ347	19201	253	35° 65' 87"	138° 57' 21"	20210524 ~20210531	8.125㎡	事務所建設
甲府城下町遺跡	山梨県甲府市中央4丁目347							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲府城下町遺跡	城下町	近世 近代	廃棄土坑・溝状石列 建物柱跡・土坑・小穴	土器・陶器・磁器 木製品・石製品 金属製品 動植物遺体など	城下町における町人居住地の発掘調査。

要約	<p>周知の埋蔵文化財包蔵地である甲府城下町遺跡のうち、甲府城より南南東約740mの中央4丁目347地点の発掘調査である。調査地は、近世において甲府城三の堀郭内の下府中の町人地である柳町三丁目に所在し、甲州道中に面するとともに、付近に問屋場が置かれていたことが絵図等から確認できる。極小範囲の発掘調査であるが、遺構として18世紀から19世紀の近世に当たる廃棄土坑や水路跡が検出されるとともに、近代の建物柱跡が検出された。</p> <p>近世に構築され埋没した廃棄土坑は、近代においても同位置で廃棄行為が行われていたことが確認され、敷地内の一定の場所が廃棄場所として継続利用されていたと推定される。</p>
----	--

甲府市文化財調査報告125

甲府城下町遺跡28

(山梨県甲府市中央4丁目347地点)
— 鶴田電気ビル建設に伴う発掘調査報告書 —

2022(令和4)年3月15日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 鶴田電気株式会社・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所